

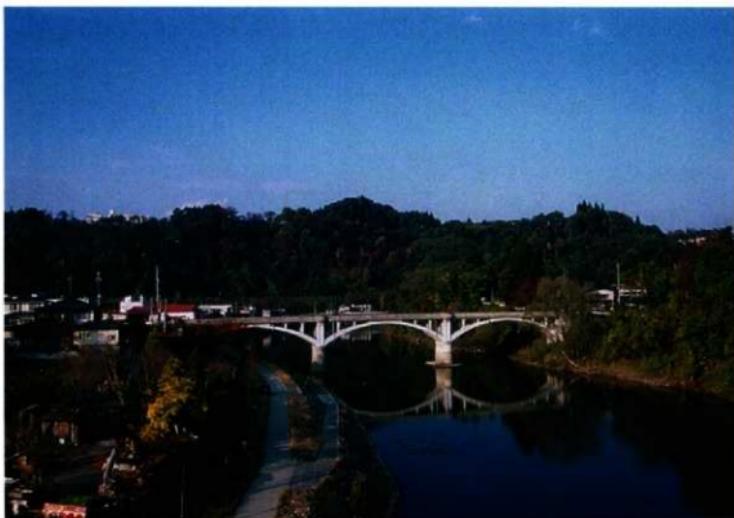
ト-699

あてらざわ
左 沢 檜 山 城 跡

2008

大江町教育委員会

卷頭写真



左沢城跡遠景（南から）



左沢城跡全景

序

15年以上の長きにわたる左沢楯山城跡の調査も一つの到達点を迎え、「左沢楯山城跡調査報告書(9)」をまとめた平成18年度以降の調査検討によって明らかになった事項を補うために、本報告書を刊行する運びとなりました。ここにいたるまで深くご指導をいただいた文化庁、山形県教育委員会を始めとする関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

楯山は、古くから最上川の広大な流れを見渡すことのできる一望千里の景勝の地として、町内外の人々に親しまれてきました。その眺めは、かつて中国明代の詩人高啓が揚子江を詠じて「たいこう ばんざん うち きた」と表現した景観に重なるものとして、大江町の町名の由来となったものであります。見る者的心を魅了してやまないその眺望は、この地に暮らす人々が日々の暮らしを憩いくつろぎながら郷土の誇りを実感することのできる景観であり、遠く異郷にある人々にとっては望郷の思いを慰め自身の魂のありようを指し示してくれる心の原風景でもあります。

米沢を源流として左沢に流れ入る最上川は、行く手を楯山によって壁の如くさえぎられ、流路を大きく東に変えて村山盆地に向かいます。その屈曲点にある左沢は、近世に入ると最上川舟運の河岸として発達し、陸上交通においても要衝の地であったことから商業地として活況を呈するようになりました。上布と呼ばれた高級織物の原料である青苧の生産に携わった旧家の建物や、商いの町としてにぎわいの面影を残している原町通り、教育においても明治6年に西村山地区で最も早く置かれた小学校が「第一番左沢学校」と称された事実などから当時の繁栄ぶりがしのばれます。

最上川流域の左沢の地で営まれてきた人々の暮らしとなりわいが織り成す景観に支えられてきた、私どもにとってあまりにも身近な楯山に関して、その文化的な価値を評価していただくに際し本報告書の刊行がいささかでも資するものがあるとすれば幸甚この上なく存じます。今後とも歴史と文化に支えられた魅力ある町づくりの推進に向けていっそうのご指導を賜りますようお願い申し上げる次第であります。

平成20年10月

大江町教育委員会

教育長 富樫 是行

例　　言

- 1 本報告書は平成7年度から9年度までの試掘調査を経て、平成10年度から文化庁の国庫補助を受けて実施した左沢楯山城跡の調査報告書である。
- 2 平成18年度に調査成果の総括として『左沢楯山城跡調査報告書(9)』を刊行したが、今回はその後の調査検討により判明した事項を報告するものである。調査の内容については公表されているが、本報告書を正式なものとする。遺構については、新たに判明した事項を踏まえ、再検討を行った。検討にあたっては、左沢楯山城跡調査関連委員である宮本長二郎氏よりご指導いただいた。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	左沢楯山城跡
所在地	山形県西村山郡大江町大字左沢字楯山
調査主体	大江町教育委員会
調査事務局	教育文化課長 毛利登志浩 社会教育主幹 佐藤 准一 社会教育係長 西田 正広 社会教育主任 上田 美紀 社会教育主事 菊地 泰子 町史編さん事務局員 村上 宗紀
調査担当者	社会教育主任 上田 美紀 社会教育主事 菊地 泰子
左沢楯山城跡調査関連委員会	
伊藤清郎 入間田宣夫 大場雅之 片桐 隆 金山耕三 川崎利夫 北畠教爾 佐藤庄一 鈴木 熟 田中哲雄 誉田慶信 宮本長二郎 横山勝栄	
調査指導	文化庁 山形県教育庁文化遺産課
調査協力	財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 4 建物プランの検討にあたっては、八戸市教育委員会 市史編さん室長 佐々木浩一氏より多大なご教示をいただいた。
- 5 編集委託業者は下記のとおりである。
株式会社セビアス
- 6 出土遺物及び調査記録類は大江町教育委員会が一括保管している。
- 7 本書の作成・執筆は上田が担当した。

目 次

I	左沢楯山城跡の概要	
1	左沢楯山城跡の歴史	1
2	左沢楯山城跡の地理	1
II	調査の経緯	7
III	遺構	
1	北 西 部	9
①	C1	9
②	C2	10
③	C3	11
④	C4	12
⑤	C5	13
⑥	C6・7	14
2	北 東 部	15
①	C8	15
②	C11	19
③	C12・13	20
④	C16	21
⑤	C17	22
⑥	C19	23
⑦	C9	25
⑧	C10	25
⑨	C20	26
3	南 部	27
①	B1	27
②	B2	27
4	ま と め	27
IV	遺 物	30
1	概 要	30
2	ま と め	31
V	総 括	
1	左沢楯山城の遺構と構造	35
2	左沢楯山城の遺物と時期	36

表

第 1 表 年表.....	3	第 3 表 遺物観察表	34
第 2 表 調査の経緯.....	7	第 4 表 左沢楯山城跡の歴史と遺物	36

図 版

第 1 図 左沢楯山城域内、周辺主要箇所.....	2	第 14 図 C12 調査区平面図	20
第 2 図 18世紀の交通路	5	第 15 図 C13 調査区平面図	21
第 3 図 現代の地図で見る 18世紀の交通路	6	第 16 図 C16 調査区平面図	21
第 4 図 左沢楯山城跡調査区位置図.....	8	第 17 図 C17 調査区平面図	22
第 5 図 C1 調査区平面図	9	第 18 図 C19 調査区平面図	23
第 6 図 C2 調査区平面図.....	10	第 19 図 C9 調査区平面図	24
第 7 図 C3 調査区平面図.....	11	第 20 図 C10 調査区平面図	25
第 8 図 C4 調査区平面図.....	12	第 21 図 C20 調査区平面図	26
第 9 図 C5 調査区平面図.....	13	第 22 図 B1 調査区平面図	28
第 10 図 C6・7 調査区平面図.....	14	第 23 図 B2 調査区平面図	29
第 11 図 C8 北側平面図.....	16	第 24 図 遺物実測図 (1)	32
第 12 図 C8 南側平面図.....	17	第 25 図 遺物実測図 (2)	33
第 13 図 C11 調査区平面図	19		

写 真 図 版

航空写真（上が北）	写真図版 1	蛇沢現況（南から）	写真図版 3
楯山公園からの城下（北から）	写真図版 1	楯山公園（西から）	写真図版 3
B2（八幡平）遠景（北から）	写真図版 2	C4・5 発掘調査航空写真（上が北）	写真図版 3
B1（千疊敷）遠景（北西から）	写真図版 2	C8 北側空中写真撮影（上が北）	写真図版 4
C17～13 現況（南から）	写真図版 2	C9 発掘調査航空写真（上が北東）	写真図版 4
C8 現況（C9 南から）	写真図版 2	C8 南側（寺屋敷）池状遺構石組（西から）	写真図版 4
C9 切岸（北から）	写真図版 2	C8 南側（寺屋敷）池状遺構石組（西から）	写真図版 4
堀切（北東から）	写真図版 3	C9 布施精査状況（北西より）	写真図版 4
井戸跡（東から）	写真図版 3	B1（千疊敷）堅穴状遺構（西から）	写真図版 4

I 左沢楯山城跡の概要

1 左沢楯山城跡の歴史

左沢楯山城跡は、山形県西村郡大江町大字左沢字楯山・元屋敷に所在する。

左沢楯山城を築城した左沢氏は、大江氏の一族である。大江氏がこの地に根付く契機となつたのは、12世紀末に大江広元が寒河江荘の地頭職に任命されたことであった。鎌倉時代の左沢は寒河江荘地頭大江氏の支配下に置かれた。南北朝時代になると、大江氏は主要な拠点である寒河江・白岩・溝延・柴橋・左沢・荻袋・見附などに一族を配し、城館を築いていく。そして、本拠地ごとに寒河江氏、溝延氏、白岩氏、そして左沢氏へと分かれる。

左沢に築かれた左沢楯山城は正平年間(1346~70)頃、七代大江時茂の三男元時により築城されたと伝えられる。以後、左沢氏を名乗り、最上川西部の西村山に勢力をのばすが、戦国時代末期の天正12年(1584)に最上義光に滅ぼされ、左沢は最上氏の支配下に入る。その後、慶長5年(1600)の出羽合戦においても、左沢楯山城は重要な役割を担ったが、1622年最上氏は改易となり、それに応じて左沢楯山城も廢城となる。史料からは、14世紀後半に築城され、廢城となる17世紀前半まで約260年間機能していたことが読みとれる。大江氏及び左沢楯山城の詳細な歴史に関しては、表1の年表の通りである。

最上氏が改易になった後、左沢は左沢藩領、幕府領主内藩領り地、庄内藩領、松山藩領と変転する。元和8年(1622)左沢藩主となった酒井直次は新城(小深川城)の築城と城下の造営に着手した。直次は、左沢楯山城の城下である元屋敷地区にあった実相院・称念寺・巨海院・八幡神社などの寺社を小深川城下に移すとともに、内町・横町・原町・御免町などの町割りを行なった。これが近世の左沢の町並みである。その後、左沢には米沢藩陣屋が置かれ、最上川舟運における米沢・酒田の中継地となり、最上川舟運の河岸として発展していく。

2 左沢楯山城跡の地理

左沢楯山城跡は、山間部渓谷である五百川渓谷を北流して大江町左沢に入る最上川が、急峻な楯山に突き当たって、流路を大きく東へ変えて村山盆地へ流れ出る。その屈曲部の楯沢山丘陵に立地している。

城跡の山頂の標高は222.13m、最上川水面の標高は112m前後で、その比高差は約110mである。城跡の東と北側は檜木沢(楯の沢)の深い渓谷で防御され、その周囲は山々が連なる。南側は急崖をなし、眼下に最上川を眺めることができ、西側は通称「裏山」と呼ばれる丘陵で緩斜面となっている。

現在、西側は国道112号線(月山新道)に至る国道458号線が通り、東側には、山形自動車道が走っている。

左沢楯山城跡は、城内を横断する「蛇沢」という沢によって、曲輪が多数造成された北側丘陵と、最上川から急角度で立ち上がる南側丘陵とに分けられる。

中

世

近

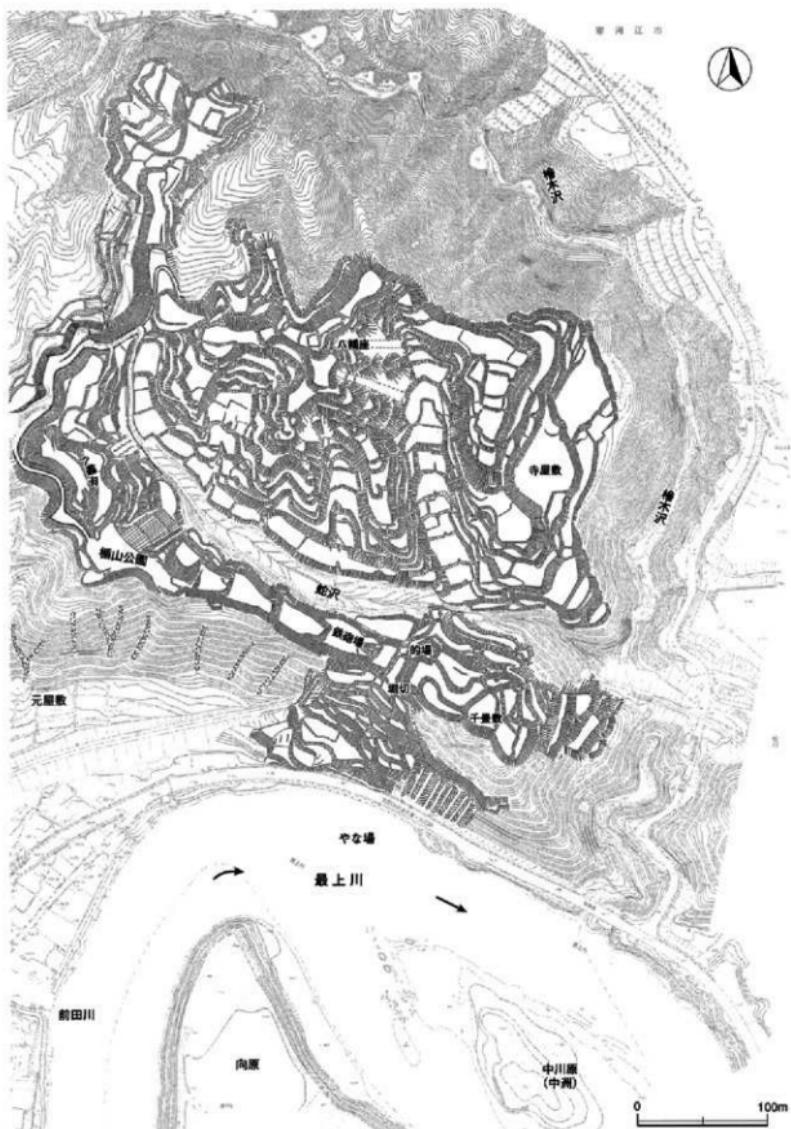
世

張

1

1

I 左沢権山城跡の概要



第1図 左沢権山城城内・周辺主要箇所

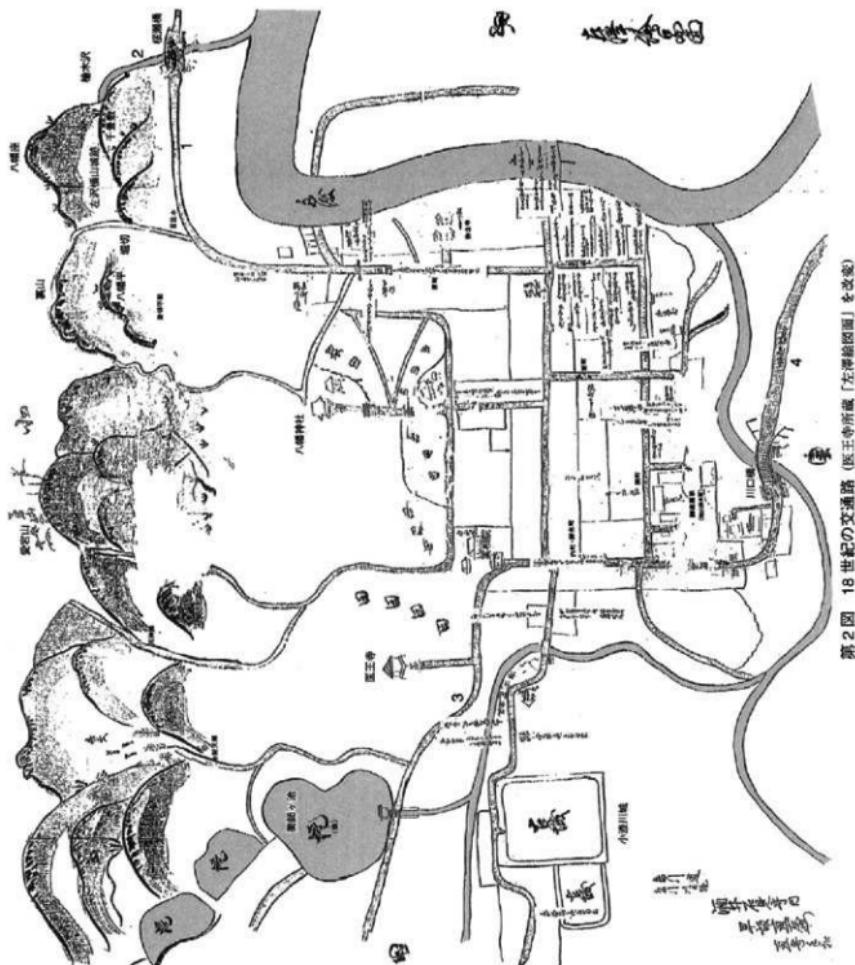
第1表 年表

西暦	年号	事 項	参考事項
1184	元勝元	中原広元、公文所（のち政所）別当となる。	否妻鏡
1189	治承5	中原広元、幕府体制確立と奥州平定の功により寒河江・長井の荘を賜るとされる。	安中坊系図
1190	建久元	多田仁綱、中原広元の代として寒河江荘に入部。初め本館（寒河江市本館）に住し、後吉川に移る。多田仁綱は広元の義の父に当たるという。	安中坊系図
1191	建久2	觀広、父広元の許可を得て駒ヶ岡八幡宮の神嘗を勧請し、寒河江八幡宮を建立すると伝える。	寒河江八幡由縁書
1192	建久3	觀広、多田仁綱の後を受けて寒河江荘を守るとされる。	安中坊系図
1216	建保4	中原広元、勅裁を仰ぐ「大江」の姓に選る。	有妻鏡
1219	建保7	武藏守觀広入道（寒河江）が京都守護に任命される。	否妻鏡
1221	承久3	京都守護の前民部少卿觀広入道（寒河江）、承久の亂で後鳥羽上皇方に加わり、觀広は閑院の付近で役務、安を出す。觀広、寒河江荘に潜伏するといふ。	否妻鏡 安中坊系図
1225	嘉祐元	大江広元死、年78才。觀広、父の死を悼み、阿弥陀の奉事を盡り、吉川邑に安置するといふ。	否妻鏡、安中坊系図他
1232	貞永元	大江觀広、隸倉幕府より詔語を解かれるとする。	否妻鏡
1241	仁治2	觀広没、吉川阿弥陀堂の傍らに葬るといふ。	安中坊系図
1285	弘安8	執権時、御家人事の安達宗泰を討つ（霜月黙動）。このとき大江氏の一族が多く討たれる。元代元朝の謀は寒河江城に轟く。月布川城に住みつく。（元朝の弟、觀鏡（網野人、小河と号す）、親子（十八才に、古河と号す）、公廣（材木に、西目と号す）の元の二男、信廣（秀景に））	五代主系図、否妻鏡 天文本系図、吾妻鏡
1346～	正平年間	左沢元時、菊池城を築し、寒河江八幡宮の分室を八幡舎に勅請すると伝える。	尊卑分脈本大江系図他
1356	正平11	斯波重頼（後の最上義光の祖）、羽州管領として山形に入る。以後南朝方の大江氏と北朝方の斯波氏との抗争続く。	最上氏系図、安中坊系図
1359	正平14	大江氏第六代元朝（元朝の子）南朝方に味方し斯波軍と戦い戦死するとされる。	吾妻本系図
1368	正平23	蓬川の戦い、斯波重頼・重晴ら大江氏を攻める。蓬延茂信・左沢元時・小島時干・柴原直平ら大江一族、60余人生敗するという。	安中坊系図、天文本系図他 金性山館明阿弥陀尊略縁起
1373	文中2	大江時茂没、遺命して西四男時氏に北朝に和を乞わせる。時氏、寒河江城を修する。子元時を鎌倉に仕立てて本領を安堵される。	金性山館明阿弥陀尊略縁起
1391	元中8	寒河江大江氏八代時氏没と伝える。	和田市雄書留
1448	文安5	寒河江大江氏九代元時役と伝える。	和田市雄書留
1457	長禄元	寒河江大江氏十代元時役と伝える。	和田市雄書留
1479	文明11	伊達威成、岳折攝頭と寒河江城に退る。寒河江加広、左沢振津、溝延翁ら大江一族協力して退撃するといふ。	松藏寺幹縁疏
1480	文明12	伊達威成の軍勢、岳折攝頭を討として再び寒河江城を攻める。寒河江方の式部太夫、溝延翁前、左沢振津守厚ら退散。岳折攝頭戦死するといふ。	松藏寺幹縁疏
1486	文明8	寒河江大江氏十二代元時役と伝える。	
1494	明応3	寒河江大江氏十三代知広役と伝える。	
明応年間		大江宗江、蓬川前守の武のうち若狭守在来を渡辺江（寺）へ寄進する。	渡辺寺文書
1504	永正元	最上寛定、2度目となつて中野より山形へ入部。大江氏一族団結して寛定に助力する。寒河江十四代大江元広が死没するといふ。	安中坊系図、天文本系図
1514	永正11	伊達禰宗が織田侵を始める。左沢城主三代左沢政周、最上寛定の要請を受け長谷村の戦に参戦し戦死。	伊達正・穂次考 安中坊系図
1517	永正14	伊達禰宗、天童・高畠を改めた時、大江家臣富沢太郎三郎ら7名捕獲となる。	伊達正・穂次考
1521	大永元	伊達禰宗、高瀬山城より八幡原に布陣。寒河江孝広一族を封して封贈するといふ。	安中坊系図、天文本系図
1527	大永7	寒河江十五代孝広役と伝える。	藤原院由縁書
1546	天文15	寒河江十六代元時役と伝える。	天文本系図
1560	永暦3	山形城主最上義光（最上義光の父）、寒河江城を攻める。大江元広これを退散つといふ。	安中坊系図
1565	永暦8	最上義光、東五百川新宿鳥屋ヶ森城守美作守、ハツ沼原原義謹守の兩城を攻めるといふ。	最上記・福昌寺過去帳他
1574	天文2	義光・義光孫の不和が内紛となる。寒河江城主は義光派、溝延・左沢などの城主は義謹派となる。天童・谷遣・増産・左沢の各族主が寒河江城主を攻める。	伊達家記録
1582	天文10	最上義光は下級に内紛を通り、白岩・郡四郷が大宝守方に内済したので、それを鎮圧したこと、来る春中に清水・桂蓮両氏と共に庄内に攻めこむので同時に攻撃するようより要請している。	清文書
1583	天文11	大江尚高、最上義光の庄内武藤氏攻略の影響を察し援軍を庄内に進める。	福昌寺三千仏裏書 水良軍記
1584	天文12	反義光の天童義頼、義光軍によって攻められ落城する。	大江各系図、義光物語 水良軍記
1600	慶長5	石田方の会津12万石・上杉景豊の脇、木沢城の直江山城守兼続、関ヶ原の戦いに応じ最上勢を攻める。（禪谷城→寺谷城）潤井志忠義秀ら六十里を築み白岩・寒河江・谷地の諸城を築ける。関ヶ原の戦いの結果により上杉勢退く。	小山田文書他
1614	慶長19	左沢に長尾右衛門入附、石高2300石。	最上義光分領帳他
1622	元和8	最上家改易（斯波兼賴山形入部以来の最上家支配終る）。酒井直次、左沢領主となる。	寛永家譜他
1624	寛永5	小塚城築城が始まるとする。	出羽国風土略記
1631	寛永8	左沢主酒井直次死去。左沢庵庵。庄内藩の領地となる。	大泉紀年
1632	寛永9	丸岡城の替地として左沢領12000石庄内藩領となる。左沢代官所をおく。	寛永重修諸家譜・大泉紀年
1647	正保4	左沢宿12000石松山藩領となる。	寛永重修諸家譜
1648	慶安元	左沢に松山藩の代官所が置かれる。(以後明治まで継ぐ)	

さらに北側丘陵は、入り込んだ谷によって東西に分けられる。このうち、北西部分は「八幡座」と呼ばれる権山丘陵の最高部を含み、北東部分には「寺屋敷」と呼ばれる広大な曲輪が造成されている。南側は最上川に沿った東西に長い丘陵となっており、西側頂部は「八幡平」、東側頂部は「千疊敷」と呼ばれている。

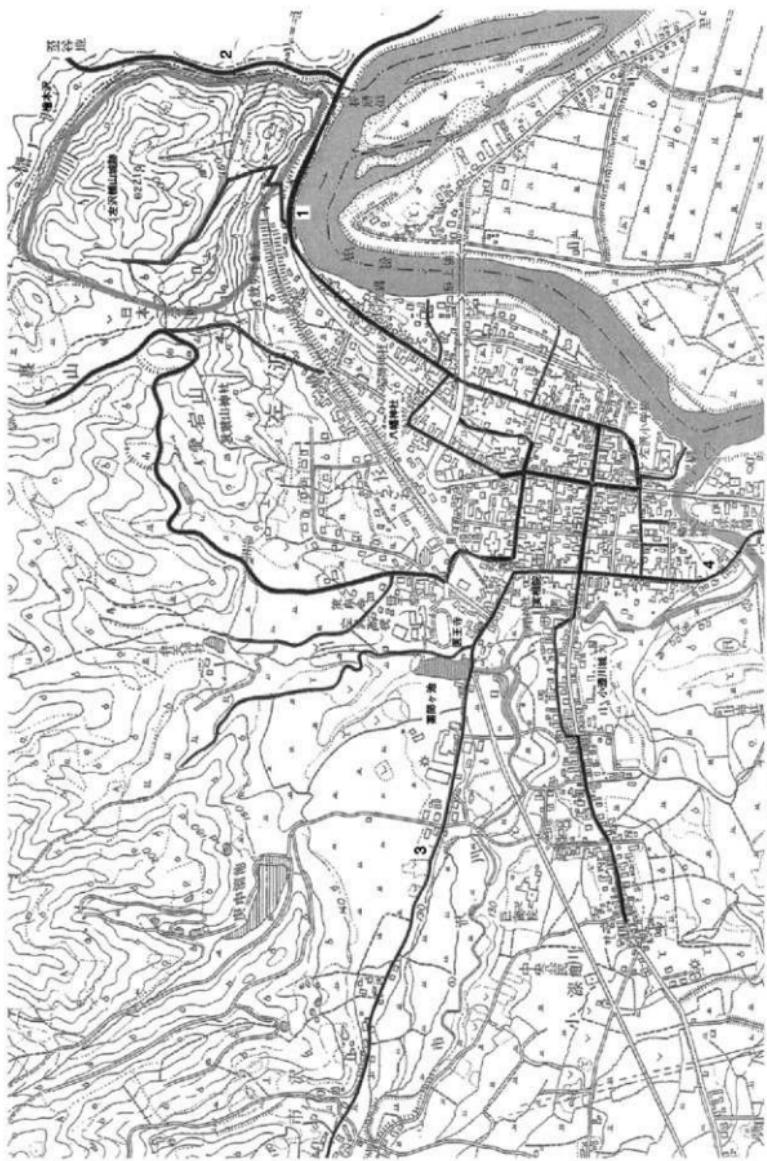
交 通 路 左沢権山城跡と交通路とのかかわりを見ると、城から東へ向かう道（第2・3図-1）は、左沢氏と同じく大江氏の一族である寒河江氏の本城、寒河江城へ続く。城の東側を北上する道（2）は、同じく大江氏一族である白岩氏の白岩城や、慈恩寺への道である。さらに、日本海側の庄内地方へ抜けるための「六十里越街道」にも接続している。城から西へ向かう道（3）は、大江町西部の願好や貫見といった、左沢氏臣家の城館跡が多数みられる地域へと続いている。また、この道は湯殿山信仰でにぎわった大井沢大日寺への参拝路でもあり、さらにその先は、北の道と同じく「六十里越街道」へと続いている。そして、南へ向かう道（4）は最上川左岸をさかのぼり、伊達氏の治める置賜地域へと続く道である。

このように左沢権山城は、大江氏一族との連絡路とともに、各方面への交通路を押さえる位置に築かれている。



第2図 18世紀の交通路 (医王寺所蔵「左澤城跡図」を改変)

I 左沢橋山城跡の概要



第3図 現代の地図で見る18世紀の交通路 (1/10000 昭和37年大江町作成)

II 調査の経緯

左沢楯山城跡の調査は、平成5年度から実施している。平成5年度から平成9年度までは、大江町教育委員会が組織した左沢楯山城跡関連調査検討委員会が中心となって、資料(古絵図・字限図・地籍図・文献史料等)の収集と内容確認のための発掘調査等を実施した。その成果を受けて平成10年度以降は大江町教育委員会が主体となり、発掘調査・縦張調査を進めた。

発掘調査については、平成7年度から9年度までの試掘調査を経て、平成10年度から文化庁の国庫補助を受けて実施している。これまでの発掘調査の総面積は4,400m²である。縦張調査については、平成16年度に完成している。

平成18年度には調査成果の総括として「左沢楯山城跡調査報告書(9)」を刊行したが、今回はその後の調査によって判明した事項を報告するものである。今後は、遺跡の保存・整備・活用を目的に、補足調査を実施していく計画である。

調査の具体的な内容については表2のとおり、調査報告書は下記のとおりである。

第2表 調査の経緯

年	目的	調査の内容				
1993	歴史と全体構造の把握	文献調査:「金谷山城別阿弥陀寺略縦図」・「天文本大江系図」・「性山公治家記録」「天正二年伊達輝宗日記」・「幕末義先分家帳」				
1994	全体構造の把握	文献調査:「羽州川越絵図」・「左洋繪面図」・「左洋御領内御絵図」				
1995	全体構造の把握	施設開発調査	発掘調査	測量開拓	調査面積	遺構
1996	八幡座周辺の構造の把握	元豊敷周辺	八幡座	7/26	50 m ²	柱穴跡・講跡
1997	八幡座周辺の構造の把握		八幡座	7/22～7/29	144.25 m ²	柱穴跡・講跡
1998	千豊敷周辺の構造の把握	千豊敷	千豊敷	8/4～8/21	120 m ²	柱穴跡・講跡
1999	寺屋敷周辺の構造の把握	八幡平周辺	寺屋敷	7/31～8/26 11/2～11/8	540 m ² 465 m ²	柱穴跡・講跡・縦跡
2000	千豊敷周辺の構造の把握	八幡座周辺	寺屋敷	8/9～9/6	465 m ²	柱穴跡・講跡
2001	八幡座周辺の構造の把握	北外部	八幡座	8/30～10/3	208 m ² 50 m ²	柱穴跡・講跡・池状遺構
2002	八幡座周辺の構造の把握	裏山	八幡座	6/3～7/22	209.25 m ² 300 m ²	柱穴跡・土坑
2003	寺屋敷周辺の構造の把握	裏山	寺屋敷	5/21～7/17	660 m ²	柱穴跡・布縫跡
2004	八幡座周辺の構造の把握	裏山	八幡座東南輪 寺屋敷	5/17～7/8	308.5 m ² 50 m ²	柱穴跡・小型穴
2005	元屋敷周辺の構造の把握	裏山	寺屋敷	11/10～25	62 m ²	横跡・講跡・柱穴跡
2006	元屋敷周辺の構造の把握	裏山	元屋敷	11/7～11/28	65 m ²	柱穴跡・溝跡
2007	元屋敷周辺の構造の把握	裏山	元屋敷	9/10～10/25	100 m ²	柱穴跡・溝跡

- | | | |
|-------------|---------------------|----------|
| 川崎利夫ほか 1999 | 『左沢楯山城跡発掘調査報告書(1)』 | 大江町教育委員会 |
| 川崎利夫ほか 2000 | 『左沢楯山城跡発掘調査報告書(2)』 | 大江町教育委員会 |
| 川崎利夫ほか 2001 | 『左沢楯山城跡発掘調査報告書(3)』 | 大江町教育委員会 |
| 川崎利夫ほか 2002 | 『左沢楯山城跡発掘調査報告書(4)』 | 大江町教育委員会 |
| 川崎利夫ほか 2003 | 『左沢楯山城跡発掘調査報告書(5)』 | 大江町教育委員会 |
| 川崎利夫ほか 2004 | 『左沢楯山城跡発掘調査報告書(6)』 | 大江町教育委員会 |
| 川崎利夫ほか 2005 | 『左沢楯山城跡発掘調査報告書(7)』 | 大江町教育委員会 |
| 川崎利夫ほか 2006 | 『左沢楯山城跡発掘調査報告書(8)』 | 大江町教育委員会 |
| 伊藤清郎ほか 2007 | 『左沢楯山城跡発掘調査報告書(9)』 | 大江町教育委員会 |
| 日下部美紀 2008 | 『左沢楯山城跡発掘調査報告書(10)』 | 大江町教育委員会 |

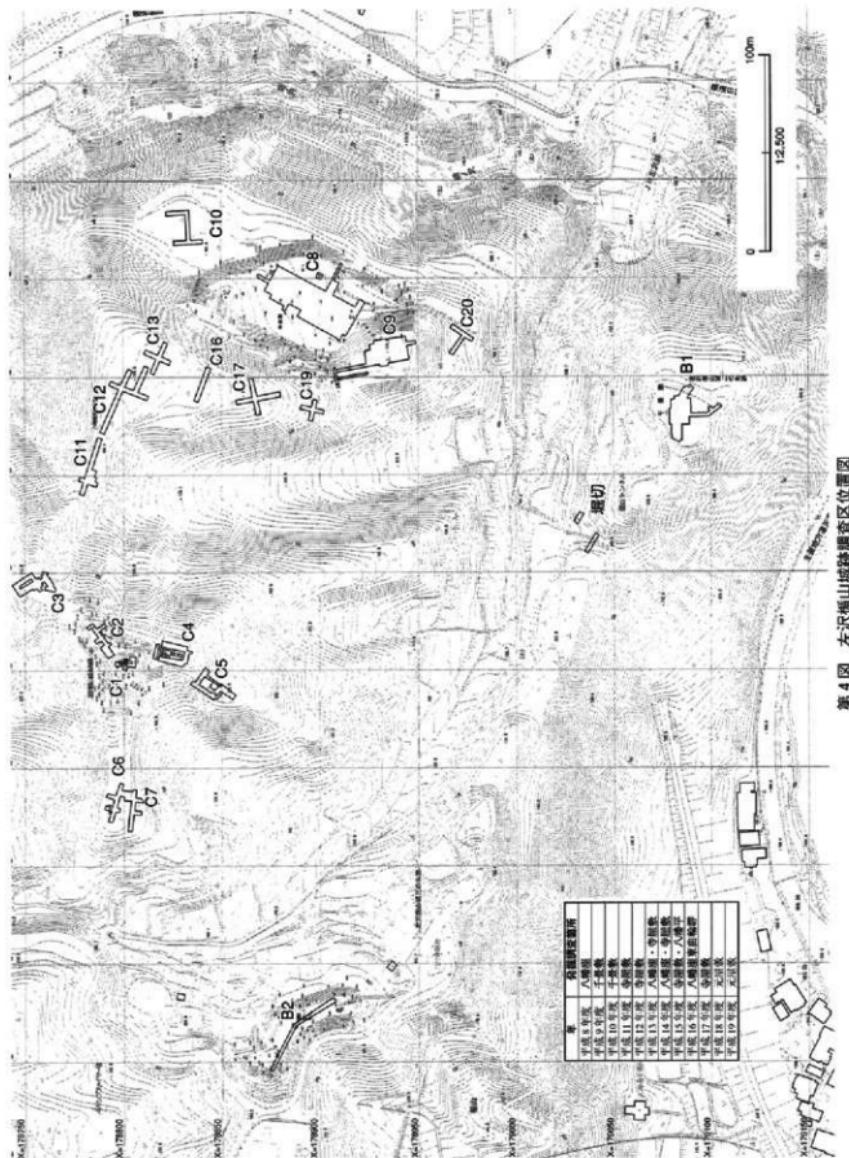
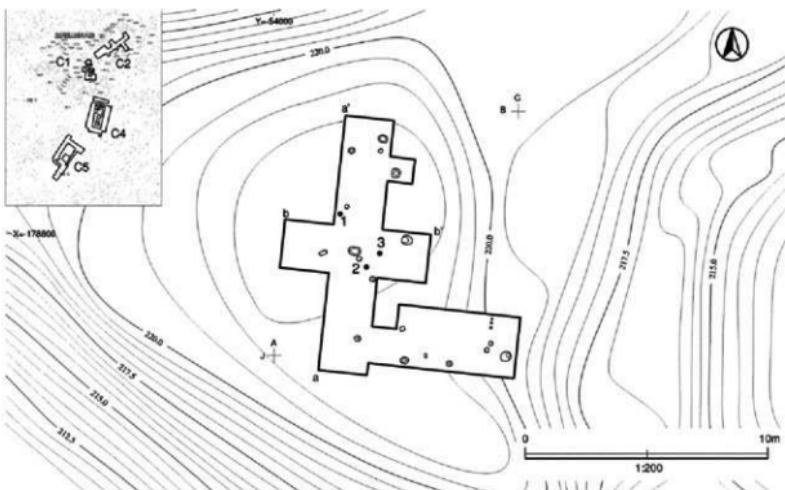


図4 左沢福山城跡調査区位置図

III 遺構

1 北西部

左沢楯山城北西部は城内で最も標高の高い箇所を含み、城の中心となる部分である。山頂部分は「八幡座」と呼ばれる小曲輪(C1)で、神社が祀られていたという伝承がある。また、C1の南方下部には「ゴホンマル」と呼ばれる曲輪(C4)がみられ、その下にも同程度の規模の曲輪(C5)が続いている。山頂の北東側にはC1から続く縦長の曲輪(C3)が連なる。一方、山頂の西側にも曲輪(C6・7)が大きく張り出している。

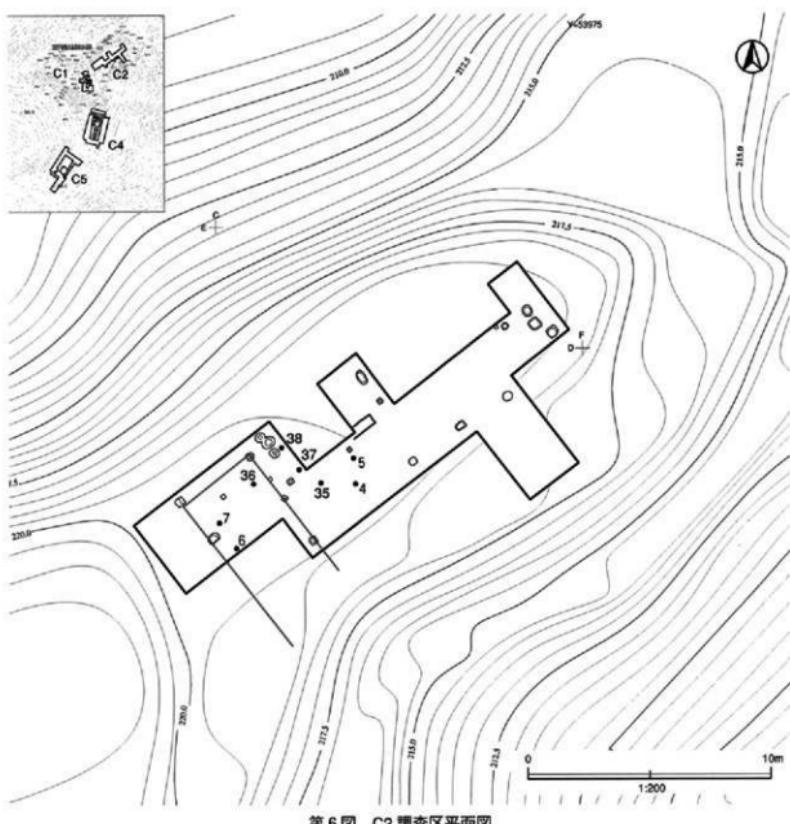


第5図 C1調査区平面図

① C1

C1は左沢楯山城内で最高所の曲輪であり、標高222m、最上川からの比高差は110m程度である。「八幡座」と呼ばれ、八幡宮があったといわれているが、面積は120m²程度と小規模である。発掘調査の結果、柱穴数基を検出した。小規模な建物の跡と考えられるが、規模等は不明である。出土遺物には、16世紀後半～17世紀前半の輸入磁器(第24図1)や、波佐見の青磁香炉片(第24図2)がある。

城の最高所であることや、「八幡座」の伝承から、小規模な社や祠といった宗教施設があったものとみられる。



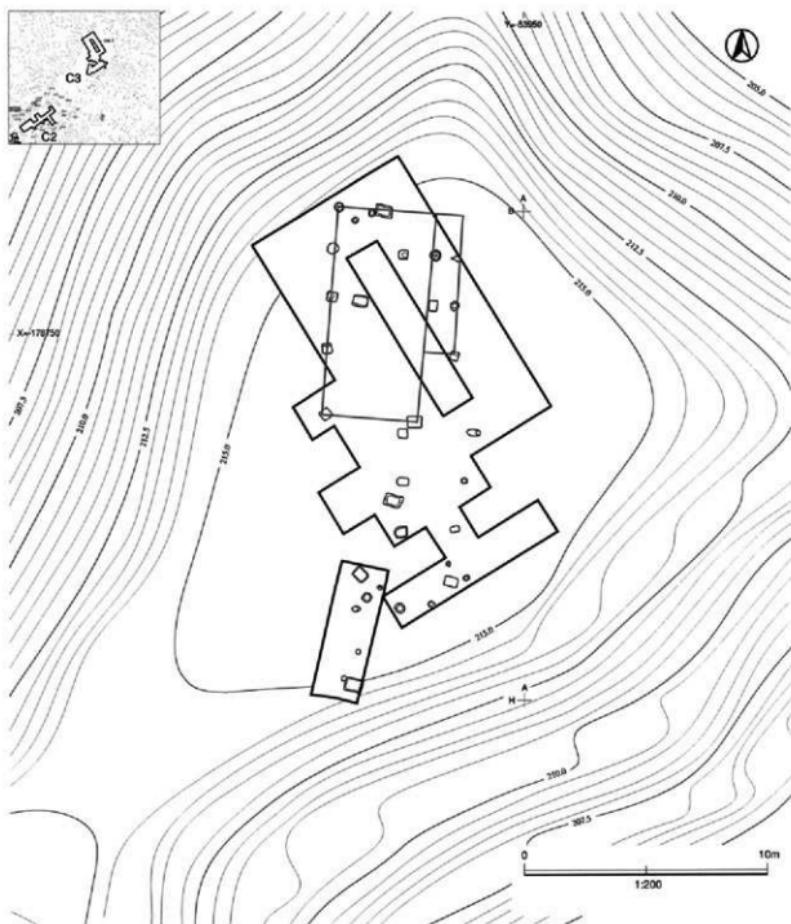
第6図 C2 調査区平面図

② C 2

砾

石 C1 から 3 m ほど下がり、北東に連結する約 180m² 程度の狭長な曲輪である。

発掘調査では、曲輪の南西部で 1×2 間程度の小規模な建物跡を検出した。C1 の宗教施設に付随する建物の可能性があるが、詳細は不明である。16世紀代の白磁片(第24図4・5)、砥石3点(第25図35、36、37・38は硯を転用)が出土している。楯山城内で砥石が出土したのはこの曲輪のみであり、曲輪の性格を考える上で示唆的である。

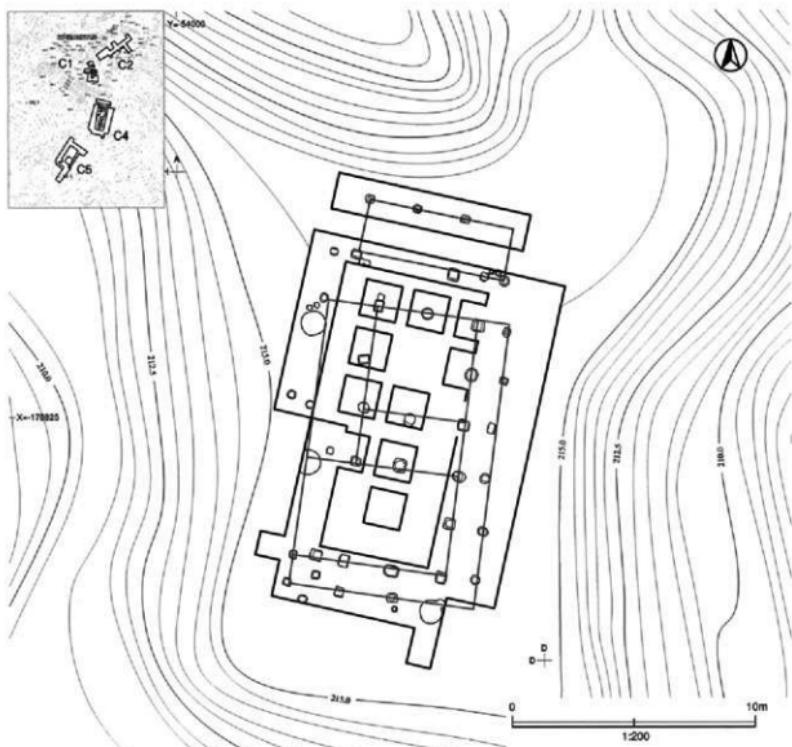


第7図 C3調査区平面図

(3) C 3

C1から帶曲輪を経た尾根の先に位置する曲輪である。標高は215mで北西に視界が開けて 兵屯所
おり、この曲輪から先は檜木沢の深く急峻な渓谷となっている。

発掘調査では曲輪の北東部で、東側に縁をもつ2×4間の建物跡を検出した。插山城北側一
帯の防護を目的とした兵屯所などであろうか。城にかかる時期の遺物は出土しなかった。



第8図 C4 調査区平面図

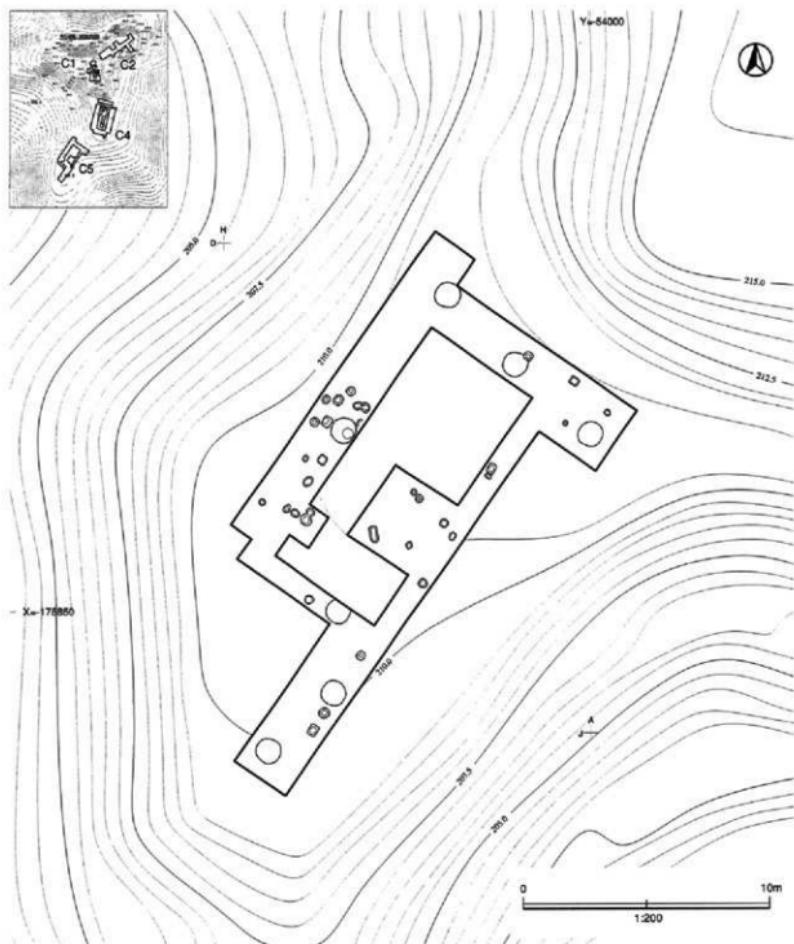
(4) C 4

主殿 C1の南側に位置し、標高は215m、南北長21m、東西幅12mの不整長方形を呈する曲輪である。C1との比高差は6.5mである。それほど大きな曲輪ではないが、城内各所に通じており、北東部の中心となる曲輪であるといえよう。

発掘調査では、2棟の掘立柱建物を検出した。1棟は3×5間と城内最大規模のものである。内部の柱の配置から、身舎2部屋で間にし字型の回廊が付き、東と南は縁が取り付く、格の高い建物であると想定される。また、北側には若干方位を違える小規模な建物がみられる。

曲輪の立地と建物の規模から考えて、3×5間の建物は左沢楯山城の主殿である。建物は曲輪の平坦面を最大限利用しており、主殿のために設けられた曲輪であるといえよう。

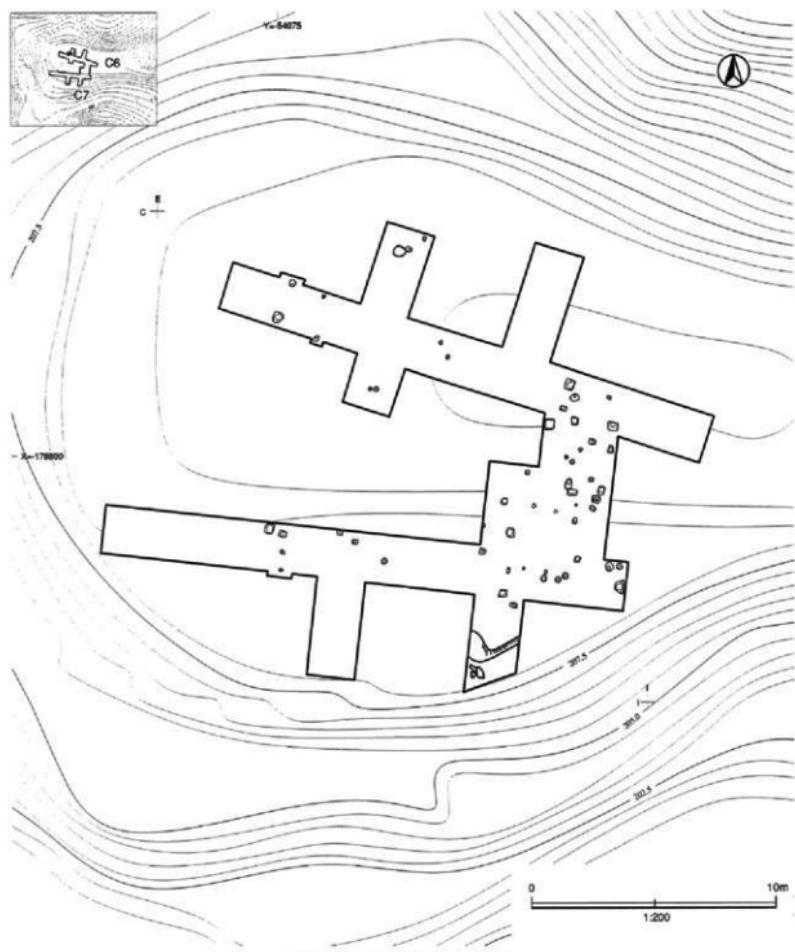
関連する時期の遺物は出土しなかったが、C8で検出した建物跡とのかかわりから、16世紀半ば～17世紀前葉のものとみられる。



第9図 C5調査区平面図

(5) C 5

C4からさらに南西に4m下がった曲輪である。発掘調査では、柱穴を数基検出した。規模を確定するに至らなかったが、1×2間程度の小規模な建物跡であろう。関連する時期の出土遺物も無く、性格の決め手を欠くが、曲輪の配置から考えて主殿に付随する施設とみられる。



第10図 C6・7調査区平面図

(6) C 6・7

物見 C1 から西側に長く張り出した標高約 209m の曲輪である。発掘調査では曲輪の南東縁辺部に偏って小柱穴を検出した。この曲輪からは城を南北に分ける蛇沢を広く見下ろすことができ、さらに南側丘陵を越えて、最上川方面にも見通しが利くことから、物見が置かれたものとみられる。

2 北東部

橋山城北東部は、北西部に比べ、大型で連続する曲輪が顯著である。特に「寺屋敷」と呼ばれるC8と、その南西上方の曲輪(C9)は城内で最も大きい。この二つの曲輪は、鋭い切岸で隔てられている。また、北西部とは、尾根(C11)で連絡しており、C11をさらに西に進んだ広大な曲輪(C12・13)からC9まで中規模の曲輪(C16・17・19)が連続と統一している。「寺屋敷」にはこれらの曲輪を経て上から入るルートと、蛇沢から小規模な曲輪(C20)や帯曲輪を抜けて入るルートがある。また、「寺屋敷」東側の帯曲輪を抜けた先には、広大な平坦地(C10)がみられる。

① C8

橋山城北東部の中心であり、標高167m、面積4,600m²の城内で最大の曲輪である。大江町寺院内に曹洞宗寺院である巨海院に残る『巨海院由緒』(『大江町史』大江町教育委員会1984)によると、當時真言宗であった巨海院は、14世紀に寒河江市落衣から橋山城内に移されたとある。C8は「寺屋敷」と呼ばれており、この曲輪に巨海院があったといわれている。

発掘調査では北側で大型掘立柱建物跡2棟、南側で小規模な建物跡と石組遺構を検出した。なお、北側については空中写真と平面図を比較したところ、相違が見られたため、写真を元に訂正を行なった。その結果、これまでの報告書で提示した平面図とは異なる図となったが、今回の報告を正式なものとする。

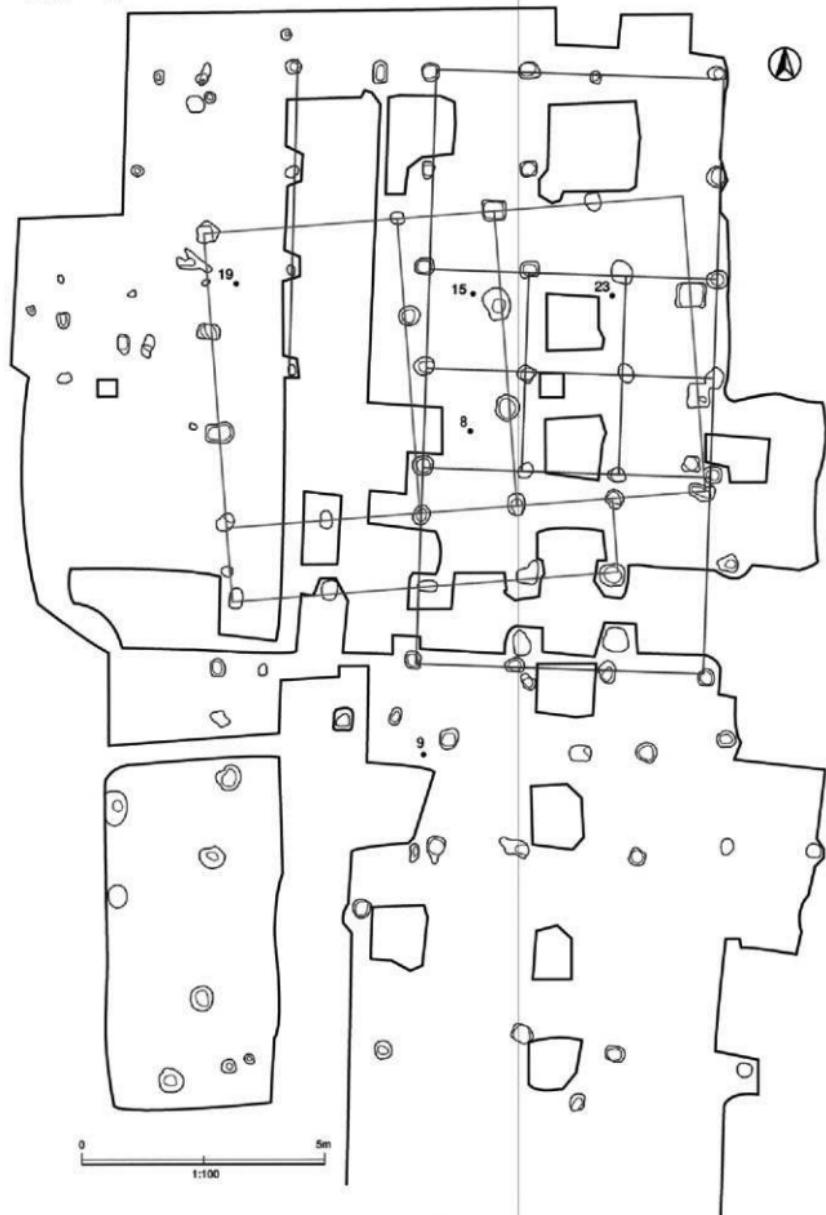
北側の建物跡のうち、1棟は3×5間(①とする)で、南側に縁をもつ。もう1棟は3×6間(②とする)で、中央の2×3間が総柱となる。②はさらに北側にも延びる可能性があるが、調査区外であるため明確ではない。また、西側では板塀とみられる、建物に平行する柱穴列を検出した。これらの建物の南側でも柱穴を複数検出しておらず、さらに1~2棟の建物があったとみられる。

①は、身舎規模がC4の大規模建物と同じであり、強い関係をうかがわせる。縁はC4の建物が東と南に取り付くのに対し、こちらは南側の一辺のみであるので、主殿との格の違いを表すものであろう。また、②は中央の総柱部分を本堂とする寺院跡の可能性がある。①と②は重複しているが、柱穴の切りあい関係が不明であり、また遺構に伴う遺物も出土していないため、2棟の新旧は不明である。

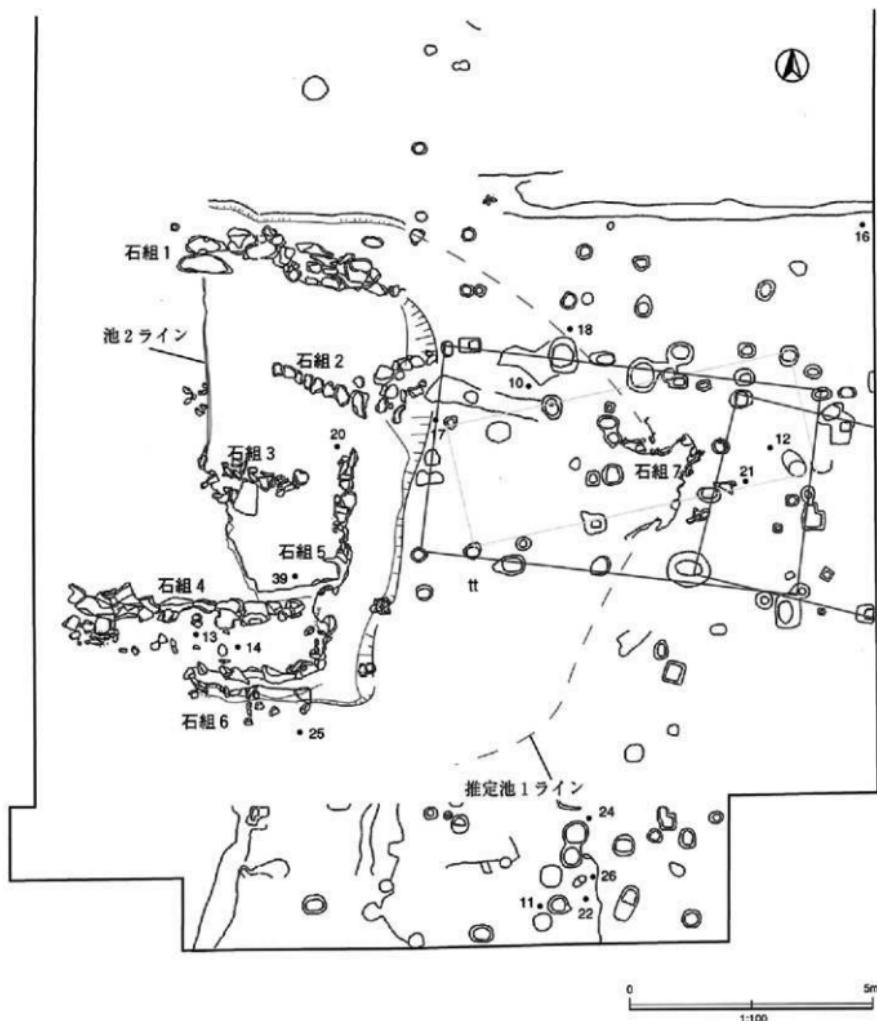
上述のように『巨海院由緒』では、巨海院は橋山城築城期である14世紀後半に城内に移されており、16世紀半ばには城下に再度移されたとの記録もある。②が寺院跡であり、またこれらの史料が事実であれば、②は14世紀後半~16世紀後半、①は16世紀半ば以降となるが、詳細についてはさらに今後の調査により確認する必要があろう。

一方、南側で検出した建物跡は3棟であるが、柱穴の分布から、さらに1~2棟が存在するとみられる。これらの建物は主軸方向や重複から、3から4時期の変遷が想定される。後述の石組遺構に関わる建物であろう。

石組遺構は調査区西側で6基、東側で1基を確認した(石組1~7とする)。石組1の南側から石組6にかけては、不整形ながら周囲より一段低く掘り込まれている。掘り込みの底面の



第 11 図 C8 北側平面図



第12図 C8南側平面図

レベルはほぼ均一で、地山直上に薄く粘土が敷かれ、一部ではその上層に黒色粘質土を確認した。これらのことから、この部分には水を溜めた池状の遺構があったものとみられる。

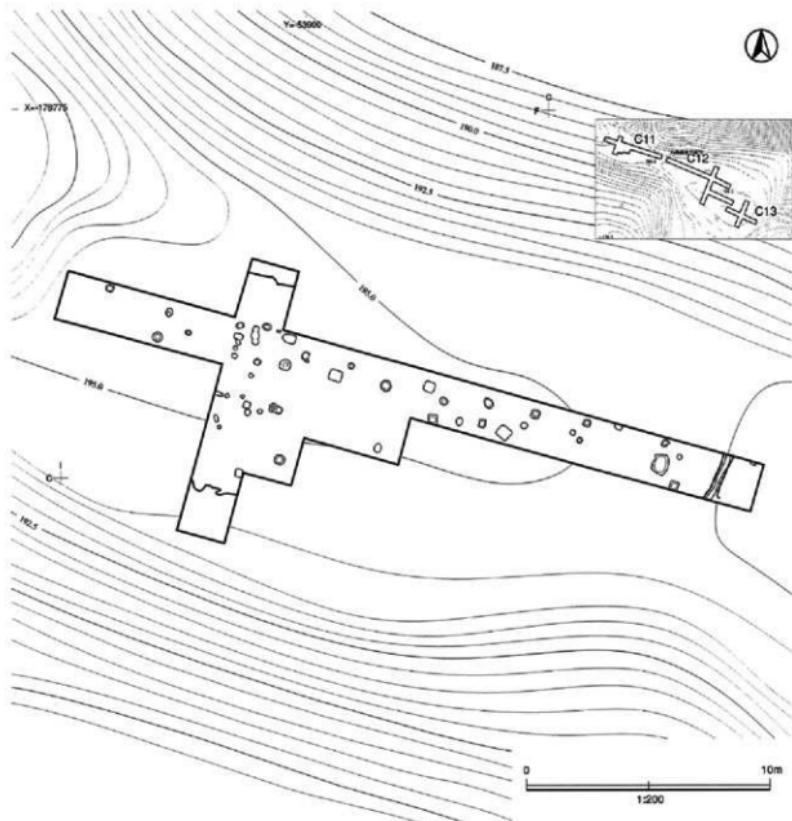
池の北岸は石組1で、南岸は溝状の掘り込みを伴う石組6により構成されているが、西岸と東岸は周辺よりも掘り下げられた状況を確認したのみで、明確な石組は検出していない。池の規模は、南北長が約8.5m、東西幅は最大で約4.5m、最も狭い部分は1m程度である。石組2・3・5は池の中に出島上に張り出しており、また石組3の西端付近には径70cm程度の石が置かれている。また、石組4は周囲よりも一段高い部分にあり、池とは接していない。石組4の西端部では石で上端部を囲まれたピットを検出しており、池に関わる何らかの構造があったものとみられる。

また、東側にも段差があり、石組7を境にして西側が一段低く掘り下げられている。掘り込みがどこまで続くのかは明確ではないが、石組1の北側にみられる段差につながる可能性もある。この石組7と1北側の段差で囲まれた内側でも、上述の池と同様に地山の上層に粘土がみられることから、この部分も池であった可能性が高い。全形・規模ともに不明であるが、少なくとも南北7m、東西9m程度はあったと考えられる。この池を池1、上述の石組1・6に囲まれた池を池2とする。

検出した建物跡のうち、1棟は池1の東側に接し、2棟は池2の東側に近接している。このことから、これら3棟はそれぞれの近接する池に関連する建物であったと考えられる。池2に伴うとした2棟の建物の柱穴は、池1底面の粘土層上から掘り込まれており、池1が埋まつた後に建てられたものであろう。このことから、池2は池1より新しいものと推測される。

斗々屋 C8から出土した遺物には、北側で17世紀前半の青磁香炉（第24図8）など、南側で15～16世紀の輸入磁器（第24図10・16・17）、朝鮮王朝陶器（第24図11）、永楽通寶などがある。

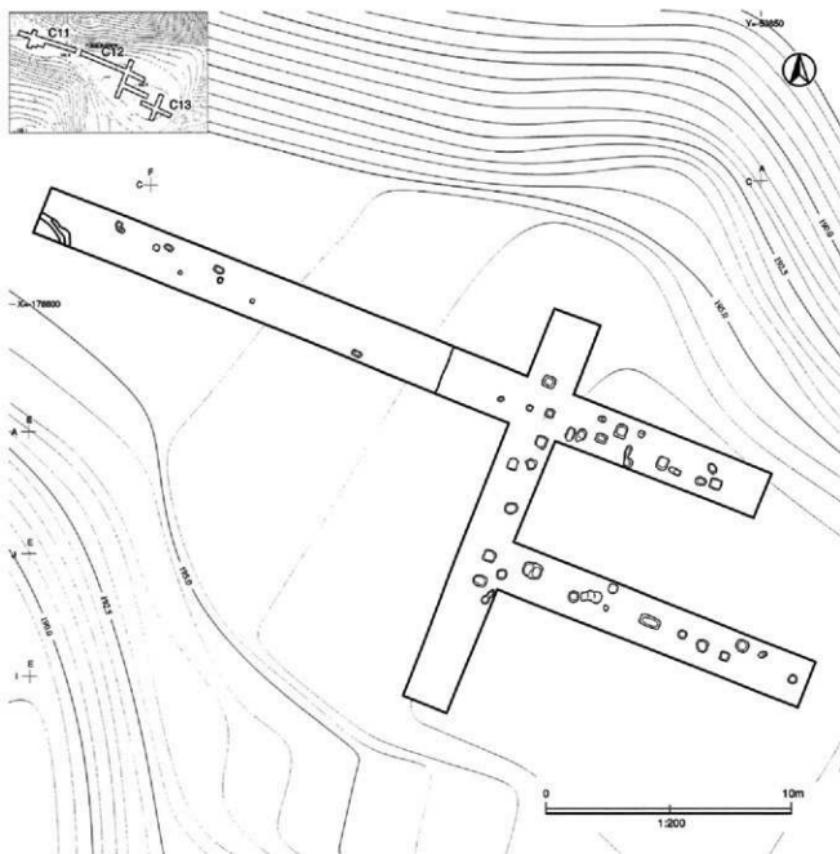
以上のように、C8では北側に大型の建物、南側に池とそれに付随する施設を確認した。これらの性格はまだ確定できないが、この曲輪は城の東側を北上する街道を見下ろす位置にあることから、城主の権威を示す目的に利用されたものであろう。性格や時期の解明のため、今後さらに調査を進める必要がある。



第13図 C11 調査区平面図

(2) C 11

北西部のC3から数段の帯曲輪を経た、一段低い尾根上に位置する。標高は195mで、東西倉庫に細長い曲輪である。調査では柱穴を複数検出したが、建物規模を確定するには至らなかった。柱穴の規模や曲輪の形状から、小規模な建物が存在したものと考えられる。C3などに食料や武器を供給するための倉庫地であろうか。

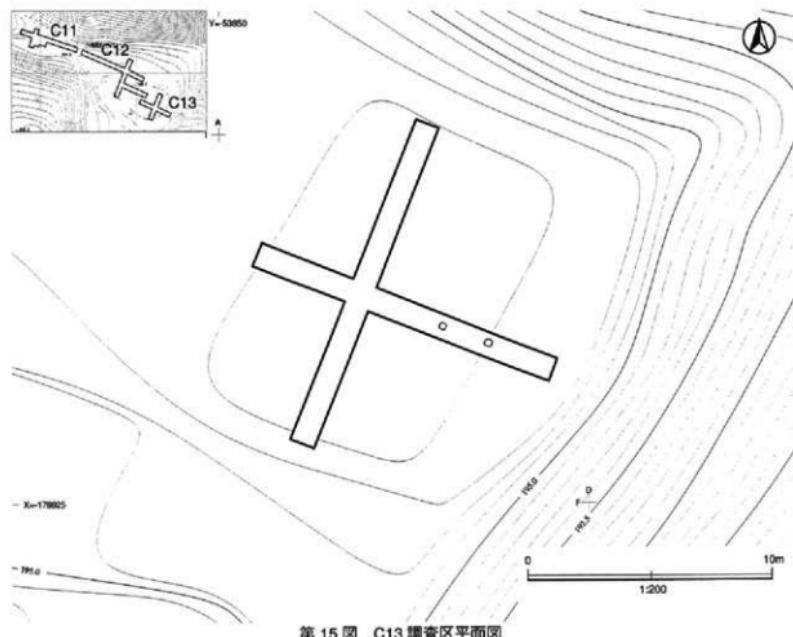


第14図 C12調査区平面図

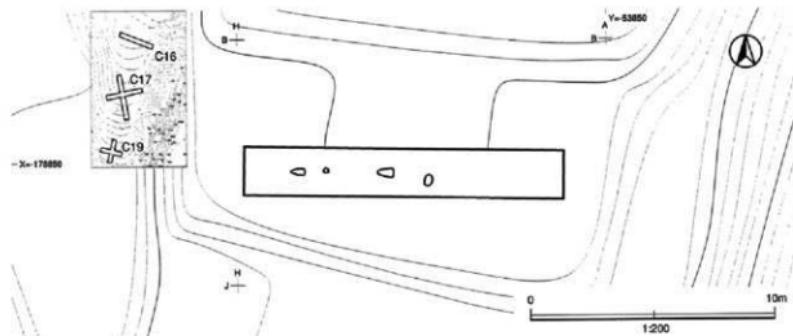
③ C 12・13

C11 から緩やかに続く尾根上の細長い曲輪である。標高は 196m で、曲輪の北側は檜木沢の非常に深い渓谷により守られる。

曲輪の配置や調査結果から、C3 や C11 に関する倉庫や兵舎が置かれたものとみられるが、調査区内に立木が多く、十分な調査ができていないため、今後さらに調査を進める必要がある。



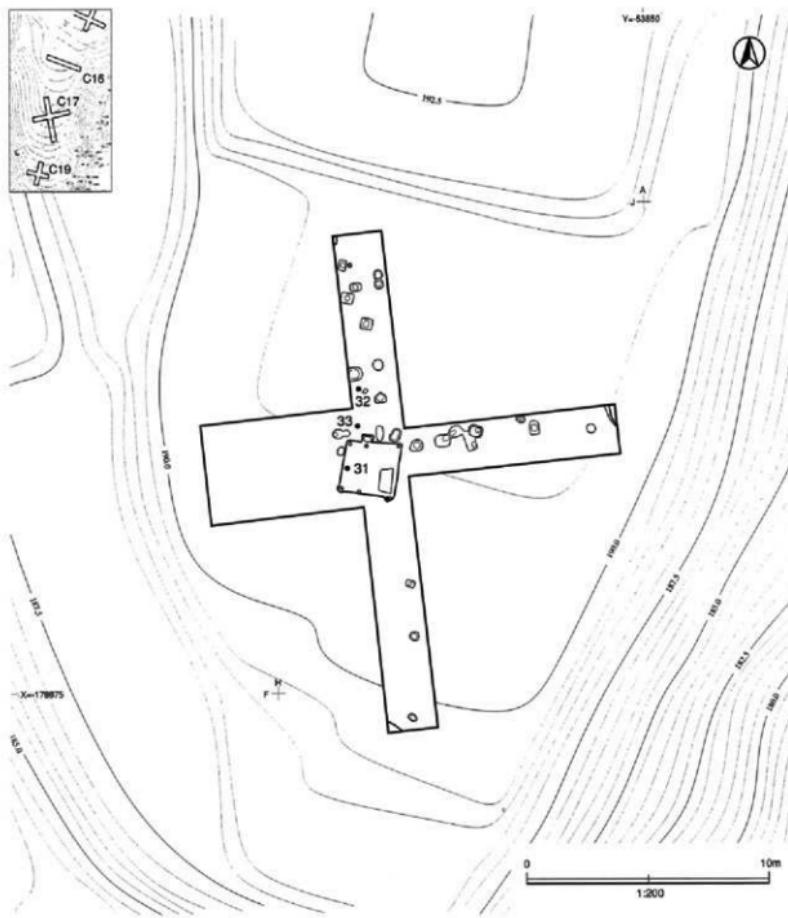
第15図 C13調査区平面図



第16図 C16調査区平面図

(4) C 16

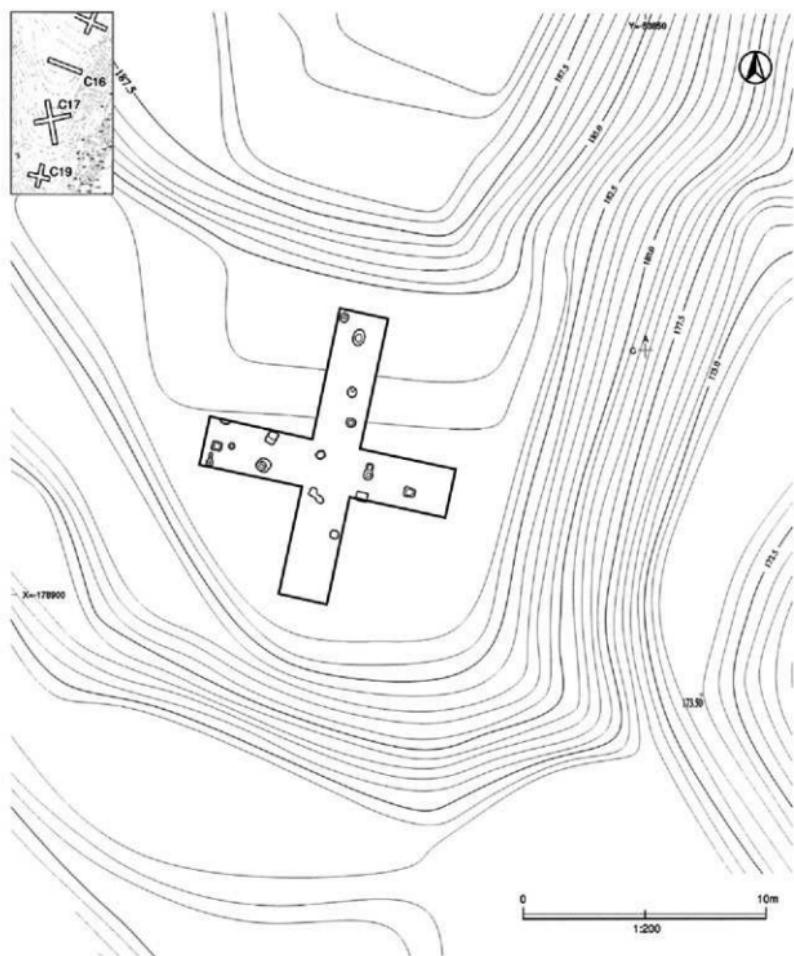
C12・C13から4m下方の小曲輪である。調査では曲輪中央にトレンチを設定したが、遺構・遺物とも僅少であった。建物等が存在しない空間だった可能性もある。今後さらに調査を進める必要がある。



第17図 C17 調査区平面図

(5) C 17

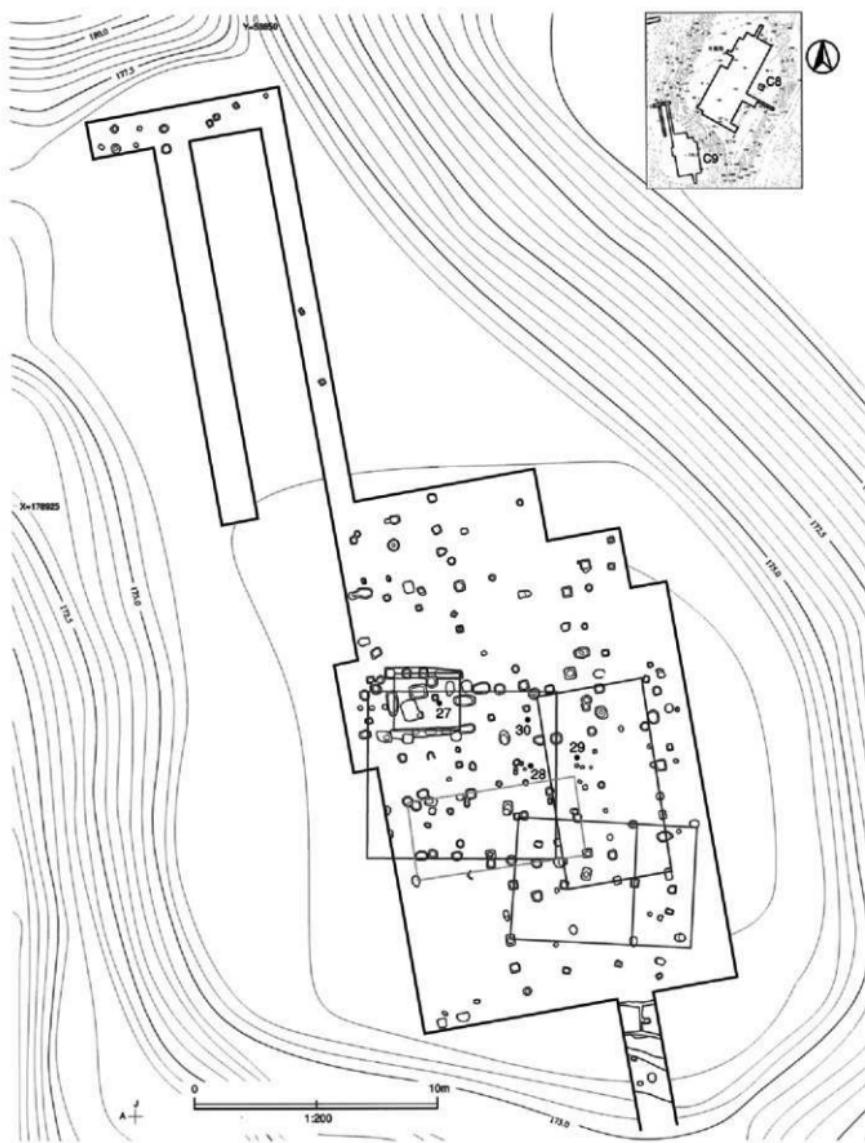
工 房跡 C16から2m下がった位置にある中規模の曲輪である。発掘調査では曲輪の中央部で竪穴建物を検出した。焼土や未製品は出土していないが、工房跡とも考えられ、未調査部分にも複数の竪穴建物が存在する可能性がある。竪穴建物周辺からは柱穴が出土しており、時期を追えて掘立柱建物が存在したことが分かる。



第18図 C19調査区平面図

(6) C 19

C17から1mほど下に位置する小曲輪である。発掘調査では柱穴を数基確認した。規模は確定できないが、小規模な建物が存在したものであろう。今後さらに調査を進める必要がある。



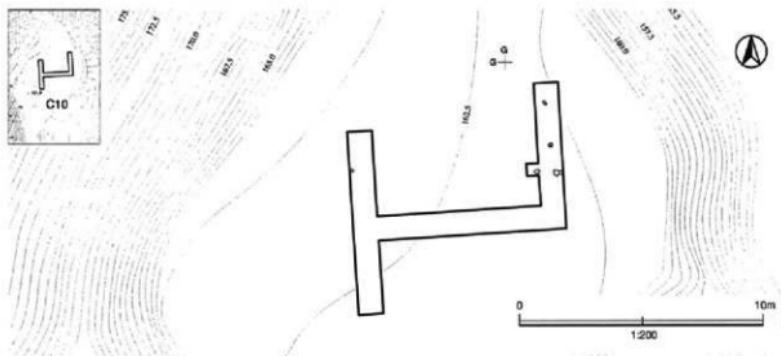
第19図 C9調査区平面図

⑦ C 9

C8 の南西側で、比高差 10m の急峻な切岸を隔てた上方にある曲輪である。直上の C19 からも 8 m の切岸によって隔てられている。南北長 40m、東西最大幅 25m と、城内では C8 に次ぐ規模をもつ大型の曲輪である。

発掘調査では、5 棟の建物跡を検出し、布置の壁立ち建物や 3×4 間の純柱建物を確認した。これらは倉庫とみられる。C8 の迎賓施設で使用される供膳具などの器材を収納するための曲輪であろう。

出土遺物には 16～17 世紀の輸入磁器（第 25 図 27・29）や瀬戸美濃の皿（第 25 図 28）などがある。

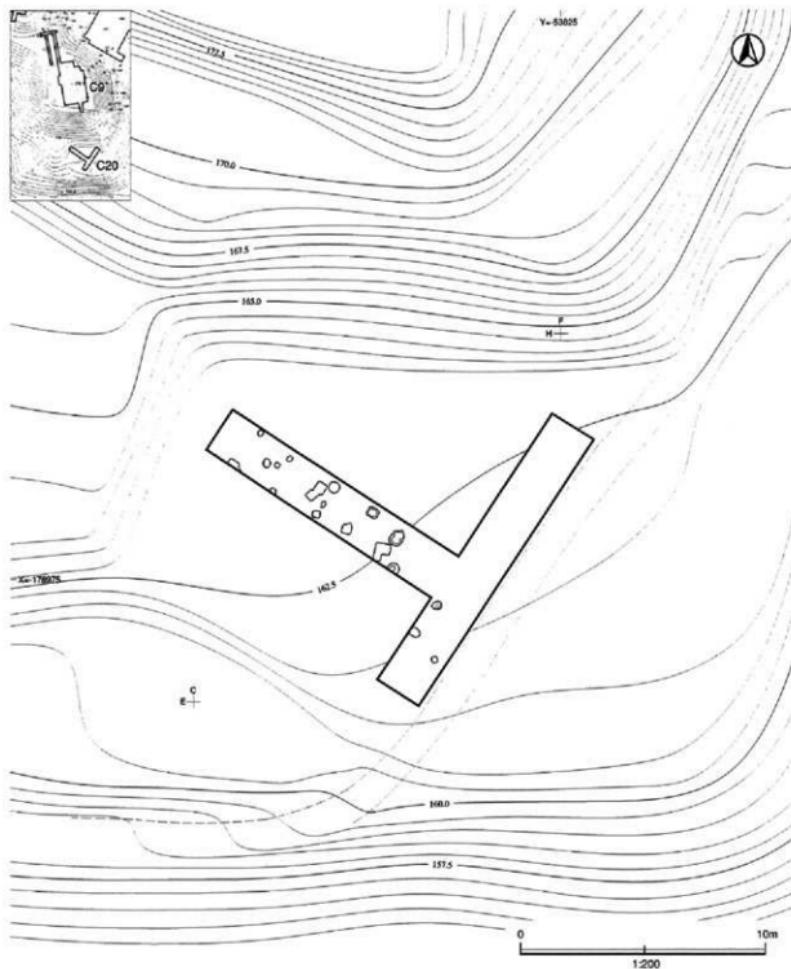


第 20 図 C10 調査区平面図

⑧ C 10

C8 の北側で急崖を隔てて約 4 m 下がった場所に位置し、南北に長い大型の曲輪である。北及び東側は一段の帯曲輪を経て、檜木沢の深い渓谷が走っている。また、檜木沢を隔てた東側は C8 と同様に街道まで見通すことができる。

発掘調査では東端付近で柱穴を検出した。東の街道を監視するための物見が置かれていた可能性がある。



第21図 C20調査区平面図

⑨ C 20

桶山城の中央を走る蛇沢からC8に向かうルート上に位置する小曲輪である。立木が多く、まだ十分な調査ができていないが、C8への通路を押さえると同時に蛇沢を監視するための施設が置かれていた可能性がある。

3 南 部

蛇沢の南側は東西に長い丘陵となっている。丘陵は最上川から急角度で立ち上がっており、直登は困難である。丘陵の尾根上には東端と西端に大型の曲輪が造成されている。東端の曲輪(B1)は「千疊敷」と呼ばれる曲輪で、「千疊敷」からは大型の箱堀と階段状の曲輪を経て西端の曲輪(B2)「八幡平」に至る。

① B 1

楯山城内で最東端に位置し、標高は181m、南北30m、東西25mの広い曲輪である。最上川を眼下に臨み、四周は全て比高差5m以上の急崖となっている。特に西側下方は箱堀により遮断されている。

調査では7棟の建物跡と性格不明堅穴を検出した。建物跡は1×2間程度の小規模なもののが中心で、C4やC8のような大型建物は存在しない。調査区東端の堅穴については、その性格を検討する必要がある。

最上川から登ってくる道が西側の堀底を通過することから、流通拠点としての最上川を押さえるための、物資の倉庫として利用された曲輪と考えられる。

② B 2

南側丘陵の最高所にあたり、標高は206mである。楯山城全体でも最西端の曲輪である。この曲輪は「八幡平」と称されており、神社が祀られていたとの伝承がある。調査では関連する遺物の出土は無かったが、柱穴を検出したことから、何らかの施設があったと考えられる。今後さらに調査を進める必要がある。

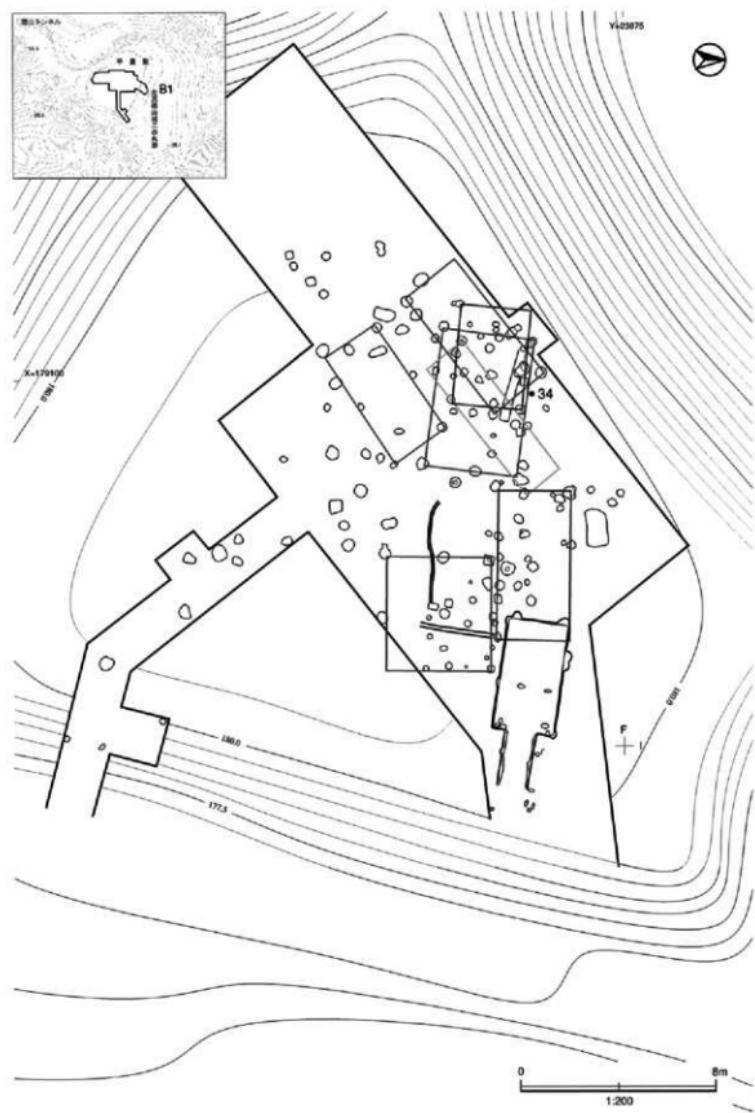
4 ま と め

左沢楯山城は北西部、北東部、南部の3区画に分けられる。

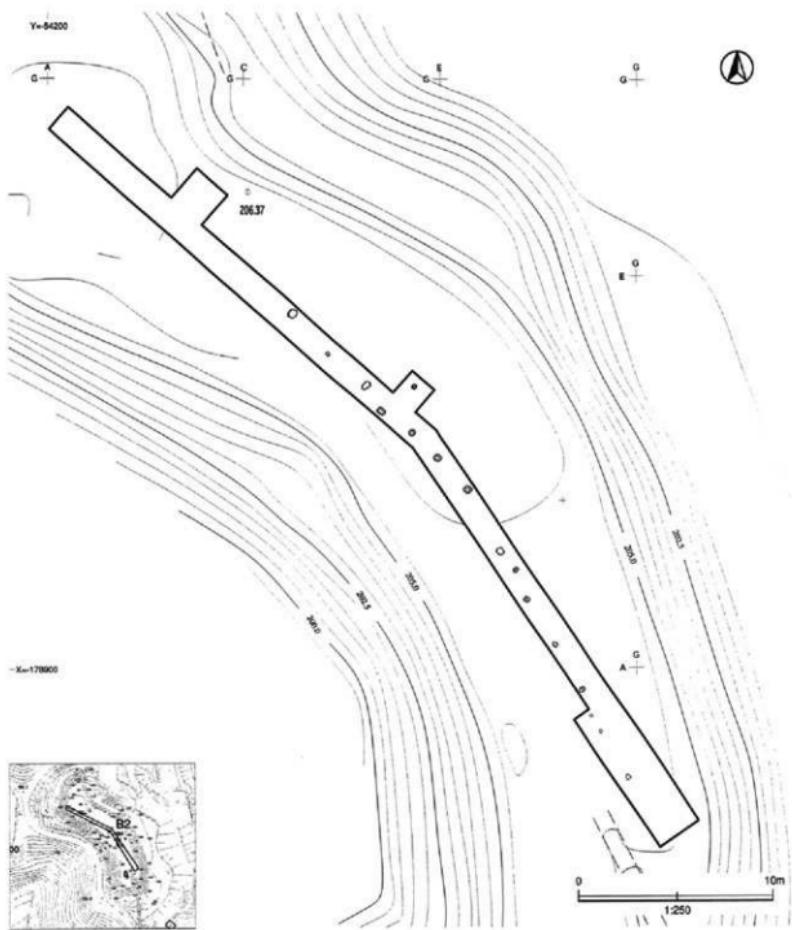
北西部の中心となるのは、丘陵最高所の直下に位置するC4の「ゴホンマル」であり、ここに主殿が置かれた。

北東部の中心となるのはC8の「寺屋敷」である。建物の性格についてはまだ検討の余地があるが、寺院や主殿級の建物が置かれ、また園池も設けられていたと考えられる。C8は東側を通る街道からの見通しが良く、街道を通るものに権威を誇示する役割を担っていたものであろう。

南部では、大規模な曲輪が東西両端に造成されているものの、大型の建物のような遺構は確認できなかった。このことから、南部は北西・北東部の主要曲輪群を守るために、防衛を担つたものとみられる。



第 22 図 B1 調査区平面図



第23図 B2調査区平面図

IV 遺物

1 概要

左沢櫛山城跡から出土した遺物については、これまでの報告書で総括的に報告した。ここでは特に、城に関連する時期のものを中心に検討した。

① 輸入陶磁器

白磁 (4・5・17)

白磁は皿が3点出土した。4・5の口縁部は外反する。3点とも白磁皿E群(森田1982)に分類される。16世紀のものである。

染付 (1・10・13・14・16・27・29・31・32・33・34)

染付は11点出土した。分類可能なものについては、小野正敏氏の分類に従って分類した(小野1982)1・27は碗である。27は染付碗E群に分類される。両者とも16世紀のものである。34は碗、31は皿である。どちらも漳州窑系の染付碗、皿に相当するものとみられ、時期は16世紀から17世紀のものである。32は染付皿B群に分類され、時期は15世紀から16世紀のものである。

10・14は内外面口縁部及び外面腰部に界線、外面胴部に唐草文、見込みに羯磨文が描かれている。染付皿B群に分類され、15世紀後半のものである。33は外面腰部に界線、見込みに十字花文が描かれており、染付皿B群に分類され、16世紀末から17世紀のものである。34は内外面口縁部、外面腰部に界線、見込みに鹿文が描かれている。染付皿E群に分類され、16世紀末から17世紀のものである。

16は景德鎮の皿であり、外面腰部に界線、見込みに植物文が描かれている。染付皿E群に分類され、16世紀のものである。13は景德鎮系の皿である。内面口縁部に界線が入り、染付皿E群に分類されるものと考えられる。時期は16世紀のものである。

斗々屋 朝鮮王朝陶器 (11)

11はいわゆる「斗々屋」の茶碗であり、16世紀末から17世紀初頭のものである。斗々屋の出土は山形城跡、亀ヶ崎城跡について、山形県内で3例目である。

② 国産陶磁器

肥前系磁器 (2・8・9・15・18・19・20・30)

肥前系磁器は8点出土した。

15・19は1630～1650年代の初期伊万里である。2点ともに皿である。15の見込みの文様は不明であり、疊付には砂粒が付着している。

9は染付碗であり、外面には牡丹文が描かれている。18は染付瓶頸、30は染付碗である。

2・8は波佐見の青磁香炉である。口縁部は外反しており、外面には鎬文が施される。20は

波佐見の青磁大皿である。見込みには鏽文が施される。2・8・9・15・230は17世紀のものである。

肥前系陶器（3・6・12・21）

肥前系陶器は4点出土した。

3・6は唐津の擂鉢であり、ともにロクロ成形である。時期は17世紀のものである。12は唐津の皿であり、内外面には暗オリーブ色の灰釉が施される。16世紀末から17世紀初頭のものである。21も唐津の皿であり、内外面に暗オリーブ色の灰釉が施されている。17世紀のものである。

瀬戸美濃（33）

33は大窓の皿であり、内外面には灰釉が施される。16世紀のものである。

かわらけ（7・22・23・24・25・26）

手づくねのかわらけが6点出土した。7を除いて、全てC8の「寺屋敷」から出土したものである。小片も多く、時期は群らかではないが、隣接市である寒河江市の三条遺跡では、12世紀の白磁・青磁とともに同様のかわらけが出土しており、插山城内から出土したかわらけも、12～13世紀のものとみられる。

③ 砥石（35～38）

4点出土した。うち38は石製硯を砥石として転用したものである。全てC2から出土した。

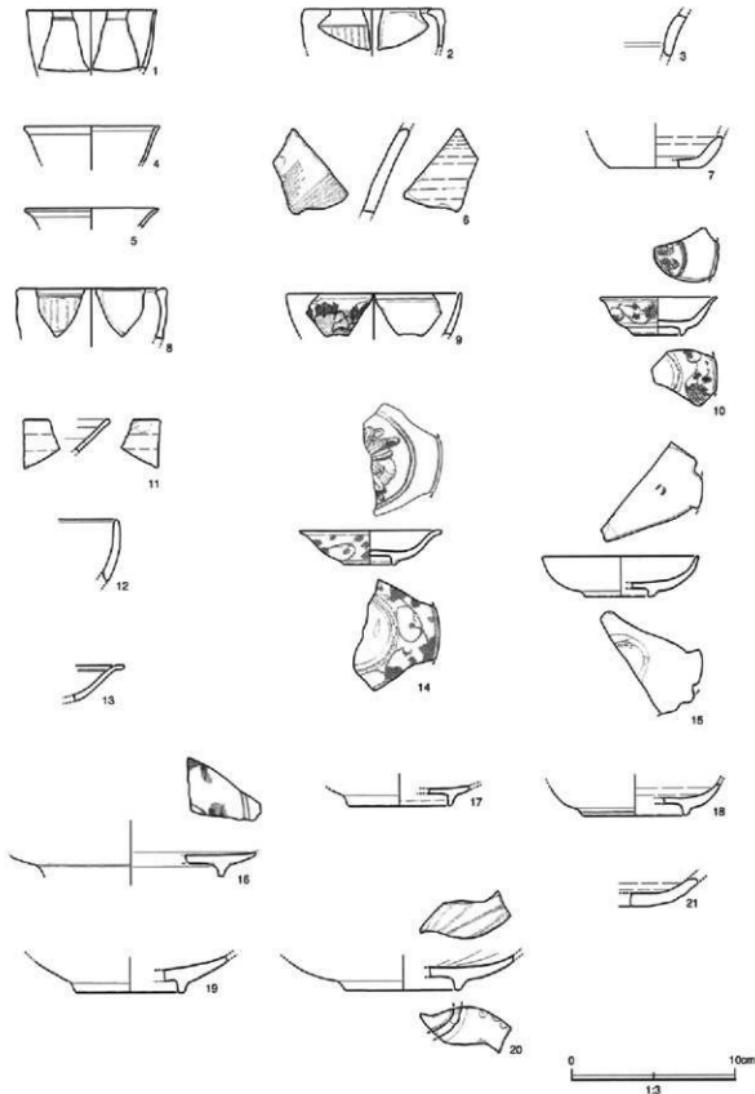
2まとめ

左沢插山城跡から出土した遺物は、ここで報告したもののはかに、18～19世紀代の陶磁器などが出土している。これらの出土遺物からは、插山城域の利用を①12～13世紀、②15世紀後半～17世紀、③18世紀以降、の3時期に大別できる。今回報告したのは①と②の遺物である。

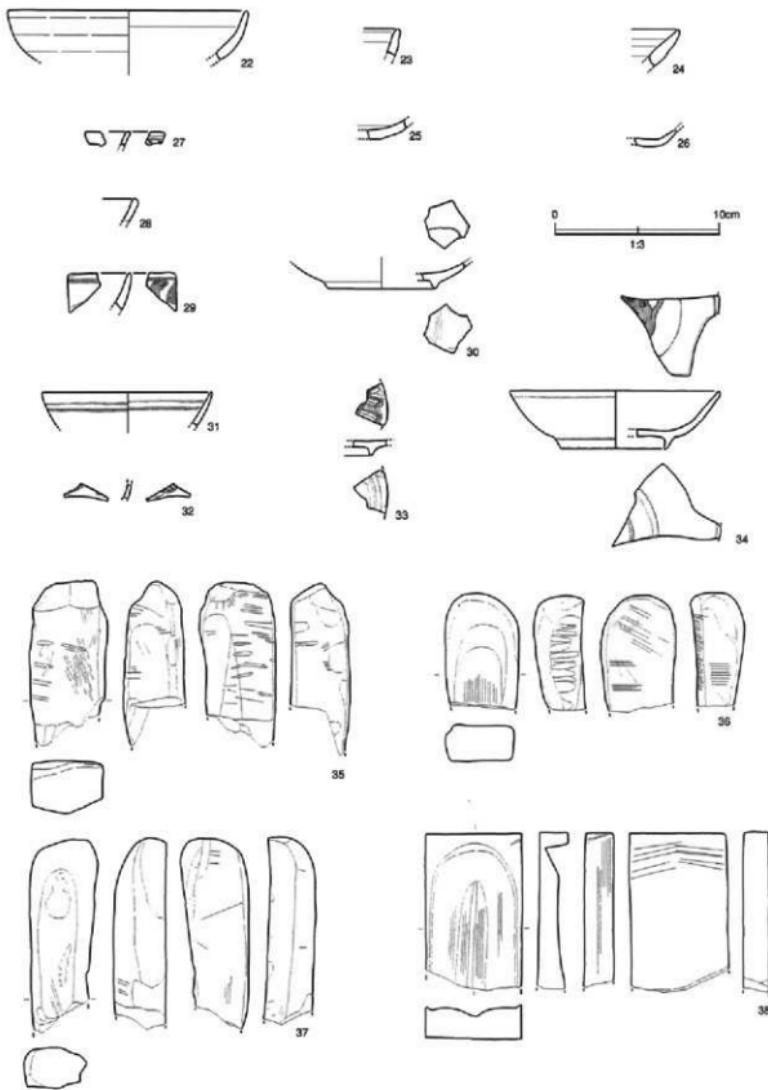
①は手づくねかわらけを中心とする。出土量も少なく、また出土する場所も限られており、遺構も明確でないため、詳細は不明である。②は中国産の貿易陶磁器を中心とした組成である。15～16世紀のものが多いが、初期伊万里など17世紀代の国産品も少數出土している。③は国産の肥前系陶磁器を中心とし、大半が小破片となって出土している。

資料や伝承から推定される插山城の築城は14世紀後半、廢城は17世紀前葉（1624年）であり、①は築城よりも前の時期、③は城館としての機能を失っている時期のものである。②は城の活動期の遺物であるが、築城期である14世紀代の遺物は出土しておらず、また廢城となる17世紀前葉よりも、やや新しい時期の遺物までが含まれている。②の遺物は城内全域で確認されているが、時期幅があるため、利用される曲輪が時期により変遷した可能性もある。調査面積に比して出土遺物が少ないことから、利用状況等は不明であり、14世紀代の遺物の有無とあわせて、今後の検討課題である。

出土遺物の時期



第24図 遺物実測図(1)



第 25 図 遺物実測図 (2)

第3表 遺物観察表

番号	調査地名	種類	部様	部位	計測値 (mm)			产地	時期	備考	報告番号
					口径	底径	厚さ				
1	C1	磁器	油付瓶	口縁部	80.0	—	—	22	中国	16C 内外透明釉	11
2	C1	磁器	青磁香炉	口縁部	96.0	—	—	35	肥前系	17C 以前 漆衣見 内外透明釉 外面緋文	18
3	C1	陶器	擂鉢	頭部	—	—	—	肥前系	17C	漆添 内外無釉 ロクロナデ	25
4	C2	磁器	白磁小瓶	口縁部	—	—	—	24	中国	16C 白磁無毛群 内外透明釉	35
5	C2	磁器	白磁瓶	口縁部	42.0	—	—	24	中国	16C 白磁無毛群 内外透明釉	39
6	C2	陶器	擂鉢	頭部	—	—	—	62	肥前系	漆添 内外無釉 外ロクロナデ	42
7	C2	かわらけ	壺	瓶部	—	36.0	—	7.0		13C 以前 漆面骨井 内外ロクロナデ 外ナデ	44
8	C3 北朝	磁器	青磁香炉	口縁部	92.0	—	—	47	肥前系	17C 以前 漆衣見 内外透明釉 外面緋文	136
9	C3 北朝	磁器	染付瓶	口縁部	106.0	—	—	35	肥前系	17C 内外透明釉 内面牡丹文	96
10	C3 北朝	磁器	壺	口縁～底部	72.0	30.0	24.0	45	中国	15C 既半 青花 実付墨毛群 内外透明釉 小面緋文 玄青緋文	221
11	C3 南朝	陶器	碗	口縁部	—	—	—	3.5	朝鮮	16末～17初 丹青+墨毛群 内外透明釉	276
12	C3 北朝	陶器	壺	頭部	74.0	—	—	4.5	肥前系	16末～17初 漆津 内外灰釉	230
13	C3 北朝	磁器	壺	口縁部	90.0	—	—	3.1	中国	16C 長徳執柄 実付墨毛群 E群 内外透明釉	174
14	C3 北朝	磁器	油付壺	口縁～底部	86.0	32.0	21.0	3.0	中国	15C 既半 青花 実付墨毛群 B群 内外透明釉 小面緋文 玄青緋文	200
15	C3 北朝	磁器	壺	口縁～底部	102.0	44.0	34.0	4.0	肥前系	17C 既半 内外透明釉 墨付紺村茶	87
16	C3 南朝	磁器	高台盤	底部(高台付)	—	—	—	3.5	中国	16C 長徳執柄 実付墨毛群 E群 内外透明釉 小面緋文	234
17	C3 南朝	磁器	白磁盤	底部(高台付)	—	62.0	—	3.6	中国	16C 白磁無毛群 内外透明釉	225
18	C3 南朝	磁器	染付瓶	底部(高台付)	—	54.0	—	4.0	肥前系	17C 内外透明釉	222
19	C3 北朝	磁器	壺	底部(高台付)	—	66.0	—	7.3	肥前系	17C 既半 カルキイ万里 内外透明釉	121
20	C3 北朝	磁器	青磁大瓶	底部(高台付)	—	70.0	—	6.7	肥前系	17C 漆衣見 内外透明釉 見込緋文	172
21	C3 南朝	陶器	壺	底部	—	40.0	—	6.4	肥前系	17C 漆津 内外灰釉 外ロクロナデ	229
22	C3 南朝	かわらけ	壺	口縁～底部	146.0	—	—	5.4	在地系	13C 漆面骨井 内外ナデ	268
23	C3 北朝	かわらけ	壺	口縁部	—	—	—	5.7	在地系	12～13C 手づくね 二段ナデ	149
24	C3 南朝	かわらけ	壺	口縁部	—	—	—	6.0	在地系	12～13C 漆面骨井 二段ナデ	271
25	C3 北朝	かわらけ	壺	頭部	—	—	—	6.2	在地系	12～13C 漆面骨井 内外ロクロナデ 漆板未切	270
26	C3 南朝	かわらけ	壺	底部	—	74.0	—	4.8	在地系	12～13C 漆面骨井 内外ナデ	269
27	C3	磁器	碗	口縁部	—	—	—	3.1	中国	16C 染付墨毛群 E群 内外透明釉	295
28	C3	陶器	壺	口縁部	—	—	—	3.9	肥前系	16C 嘉戸美濃 大腹 内外灰釉	296
29	C3	磁器	染付瓶	口縁部	—	—	—	5.0	中国	16末～17C 漆津 内外透明釉	286
30	C3	磁器	染付瓶	底部(高台付)	—	66.0	—	5.1	肥前系	17C 内外透明釉	285
31	C17	磁器	壺	口縁部	104.0	—	—	3.7	中国	16末～17初 漆津 内外透明釉	352
32	C17	磁器	染付壺	頭部	—	—	—	3.5	中国	15～16C 染付墨毛群 B群 内外透明釉	354
33	C17	磁器	染付壺	底部	—	—	—	4.2	中国	15～16C 青花 染付墨毛群 B群 内外透明釉 見込十字文	353
34	B1	磁器	染付瓶	口縁～底部	126.0	66.0	36.0	3.8	中国	16末～17C 青花 染付墨毛群 B群 内外透明釉 見込瓶文	1
35	C2	石製品	砾石	—	45.0	—	34.0	275.1		表裏使用痕	31
36	C2	石製品	砾石	—	45.0	—	26.0 (上) 21.0 (下)	170.0		表裏使用痕	33
37	C2	石製品	砾石	—	37.0	—	30.0	195.0		表裏使用痕	32
38	C2	石製品	(粗板形)	—	58.0	—	16.0	148.0		表面使用痕 高麗被熱	34
39	C8	吉鏡	承天通寶	—	—	—	—	—		銘版のみ	299

V 総括

左沢楯山城跡の調査は平成5年度から着手し、発掘調査・縄張調査・史料調査等を積み重ね、検討を繰り返してきた。ここでは、これまでの成果を踏まえ、今回の検討で得られたことについて述べる。

1 左沢楯山城の遺構と構造

発掘調査で検出した遺構と建物構造については、宮本長二郎氏により詳細な検討がなされており（宮本 2007）。今回は遺構平面図の修正等もあったため、再検討を行い、宮本氏に指導いただいた。

調査区の面積の関係上、明確に建物規模を確定できなかった曲輪が多いが、特筆すべき点は、城内最高所周辺の「ゴホンマル」と城内最大の曲輪「寺屋敷」に大型掘立柱建物跡が存在することである。これらは、その個々の建物規模が楯山城内で最大であるのみならず、二棟が同規格の身舎をもつ建物である点が特筆される。このことは二棟が近接した時期に築造されたことを示すものであろう。「ゴホンマル」の建物は二方に縁をもち、「寺屋敷」のものは一方のみであるため、「ゴホンマル」が主殿と考えられる。また、「寺屋敷」では上記建物に重複する大型建物や、圍池状遺構も検出している。「寺屋敷」は、伊藤清郎氏の指摘するように「茶の湯」ハレの場などで来客をもてなす応接の場、いわゆるハレの場（伊藤 2007）だったのだろう。

これらのことから、楯山城の主郭は最高所と「ゴホンマル」のある北西部であり、「寺屋敷」のある北東部は城主の権威を誇示するための部分であると考えられる。

最高所である「八幡座」では小規模な建物跡しか検出されず、縄張調査でも「社や祠などの信仰的建築物または櫓などの象徴的な施設が推測される」としている（大場 2007）。最高所に信仰施設を設ける例は北海道上ノ国町の勝山館でも確認されている。また、「寺屋敷」は楯山城の東側を通る主要街道からも見通すことができるため、その示威効果は大きかったであろう。

南側の丘陵は大型の曲輪を東西両端にもち、大規模な堀切が設けられている。城の主要施設である北側を守るために防衛の役割を担ったものであろう。

左沢楯山城は、以上のように3つの主要部分で構成される。各部分は谷によって隔てられながらも、曲輪によって一部で連結されており、さらに城を囲む谷・川・山々によって堅牢な構造となっている。

なお、外部から楯山城に至るには、①東側の街道から檜木沢を越えて、蛇沢に至る、②最上川岸から南側の丘陵を登り、堀底道を通って蛇沢に至る、③城の西側の丘陵（現在、朝日少年自然の家のある丘陵）をたどり、蛇沢の上方に至る、の3本が主なルートとみられるが、大道道についてはさらに検討を重ねる必要がある。「左沢村史」には西側丘陵が大道道であるという伝承が紹介されているという（鈴木 1993）。

2 左沢樺山城の遺物と時期

川崎利夫氏が指摘するように、樺山城から出土した遺物は、遺構の数に比べて非常に少ない（川崎 2007）。そのうち、城として利用された時期と関連する 15～17 世紀の遺物はさらに少なく、40 点程度である。

斗々屋 点数が少ないため十分な検討ができる状況ではないが、この時期の遺物は、大型の甕や擂鉢といった国産陶器と、小型の碗・皿などの貿易陶磁器を中心としており、同時期の東北地方における主要な城館跡と共通する組成となっている。また、県内で 3 例目となる朝鮮産陶器も出土しており、物流を掌握した在地領主の姿を描くことができよう（註1）。

城内の各調査区と出土遺物の関係は表 4 の通りである。樺山城跡は南北朝期の築城以降、徐々に城の範囲を拡大したという指摘もあるが（伊藤 2007）、出土遺物の量が僅少なため、現状では利用状況の変遷など、詳細は不明である。

また、文献等の史料からは、樺山城の築城は 14 世紀後半、廃城は最上氏が改易となり、酒井氏が新たに小津川城を築城する 17 世紀前半（1624 年頃）と推定されている（北畠 2007）。

第 4 表 左沢樺山城跡の歴史と遺物

時代	領主	できごと	八幡塚周辺					守屋塚周辺			東側		千曲	近隣	遺物の時期	
			C1	C2	C3	C4	C5	CH北	CH東	CH西	C9	C11	C17	B1		
平安			○	○				○		○				○	○	9c
13c				○				○	○	○						13c
14c	14c 半ば	大江氏 樺山城築城か（大江（左沢）元時）														14c
		東河江木八幡宮に御詔 日向海院を酒井氏から寺社領に移転														
正平 23 (1368)		漆川の戦（元時敗死）														
13c	文明 11 (1479)	伊達氏、岩瀬院に改め入る 大江氏始末してこれを破る							○	○						13c 後半
16c	永正 1 (1504)	最上義光を破る（左沢戦役）	○	○					○	○	○		○			16c
永正 11 (1544)		伊達宗宗と長谷宗で合戦 左沢戦役敗死														
天文 10 年 (1542 年)		日向院を城外へ移転（菅原宗に）														
16c 半ば		最上家の前に巣を立てる。 白浪と大沢は武田と越えを強める。														
天文 12 (1564)	義上氏	最上義光により、大江氏滅亡。 左沢は最上家直轄地となる。														
慶長 5 (1600)		勝・源の内争。 左沢は勝派（伊達、直江軍徹派）。							○	○	○	○	○	○	○	16 末～17 初
17c	1613 年？	奥尾右衛門・左沢 2300 石に配属。 7875 石は最上家直轄領。							○					○		17c 前半
元和 8 (1622)	酒井氏	最上家改易。酒井在次左沢城主に。 1624 年以降小津川城城主に着手。														
寛永 4 年 (1627 年)		天満神社、巨海院が小津川城下に 移転。														
正保 4 (1647)	酒井氏 (樺山彦)	左沢は仙台藩になる。	○	○				○	○	○	○			○		17c
寛文 4 (1664)		八幡神社、城下に移転。 「寛文」の額いか？														
18c 以降			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	18c 以降

註1) 2006・2007 年に実施した、城下の元屋敷地区の発掘調査では、朝鮮産陶器片が新たに 2 点出土している（日下部 2008）。

現在のところ、城に関連する時期で最も古い遺物は「寺屋敷」から出土した15世紀後半のものであり、榮城期とされる14世紀代の遺物が出土する可能性もある。なお、15世紀後半は伊達氏と大江氏一族との緊張関係が高まった時期であり、左沢楯山城も活発に利用されていたものかもしれない。

そして、17世紀代の国産陶磁器が出土していることに関しては、小塗川城の築城後も左沢楯山城が何らかの目的で使用されていたことを示すものである。その詳細は明らかではないが、「山形県神社史」に、楯山城内におかれた八幡神社が寛文4年(1664)に「当社の遠隔かつ陥路なるのを以て」城下に遷座したことが記載されている(山形県神社庁五十周年記念事業実行委員会2000)。17世紀代の遺物は神社推定地のみでなく、城内の広い範囲から出土しており、また、「寛文4年」は「寛永4年(1627)」の誤りであろうという指摘もあるが(北畠1984)、いずれにせよ、城の廃絶後も楯山城内が利用されていたことがうかがわれる。城内で出土している17世紀代の遺物は、このような利用と関連があるものとみられる。

遺物については上述のとおり、出土量が少なく、まだ十分に検討できる段階ではない。曲輪や構造の時期の問題も含めて、今後の課題である。

これまでの15年以上にわたる調査検討により、左沢楯山城跡の実態は少しずつ明らかになってきた。その成果は昨年度「左沢楯山城跡調査報告書(9)」で総括した。このたびの検討は、その成果を基礎として、新たに判明した点を補足するものである。

左沢楯山城跡は地域の歴史を伝える貴重な文化財である。左沢楯山城跡をこれからも守り、残していくために、更なる調査・検討を重ねたい。

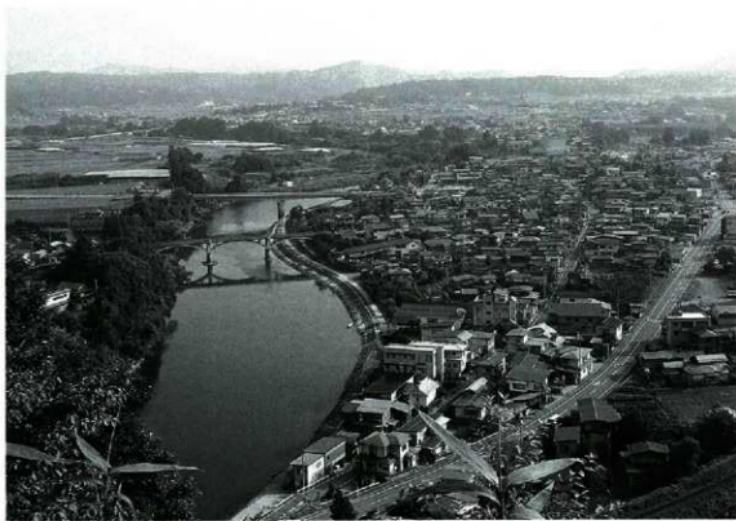
参考文献

- 伊藤清郎 2007 「調査の成果と課題」『左沢楯山城跡調査報告書(9)』 大江町教育委員会
- 大場雅之 2007 「純張」「左沢楯山城跡調査報告書(9)」 大江町教育委員会
- 沖津常太郎 1944 「左澤城址」「越上四十八館の研究」
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」「貿易陶磁研究」2 日本貿易陶磁研究会
- 川崎利夫 2007 「出土遺物から見た左沢楯山城跡」『左沢楯山城跡調査報告書(9)』 大江町教育委員会
- 北畠教爾 1984 「中世」「大江町史」 大江町教育委員会
- 2007 「文献から見た左沢楯山城跡」『左沢楯山城跡調査報告書(9)』 大江町教育委員会
- 日下部美紀 2008 「遺物」『左沢楯山城跡調査報告書(10)』 大江町教育委員会
- 鈴木 熊 1993 「左沢楯山城に関する一考察」『野に生きる考古・歴史と教育』 川崎利夫先生還暦記念会
- 高山法彦 1996 「左沢楯山城」「山形県中世城館遺跡調査報告書」2 山形県教育委員会
- 村田修三 1987 「左沢城」「図説 中世城郭事典」1 新人物往来社
- 宮本長二郎 2007 「左沢楯山城跡の建造物」『左沢楯山城跡調査報告書(9)』 大江町教育委員会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」「貿易陶磁研究」2 日本貿易陶磁研究会
- 山形県神社庁五十周年記念事業実行委員会 2000 「八幡神社」「山形県神社史」 山形県神社庁

写真図版



航空写真（上が北）



橋山公園からの城下（北から）



B2 (八幡平) 遠景 (北から)



B1 (千畳敷) 遠景 (北西から)



C17～13 現況 (南から)



C8 現況 (C9 南から)



C9 切岸 (北から)



邊切（北東から）



井戸跡（東から）



蛇沢現況（南から）



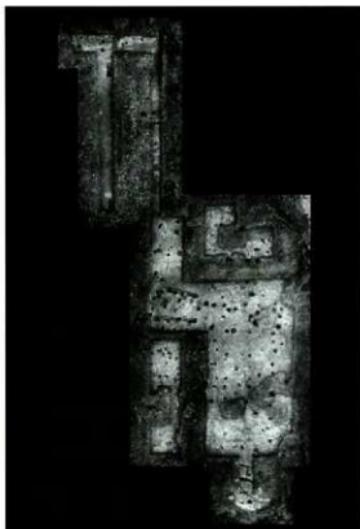
樅山公園（西から）



C4・5 発掘調査航空写真（上が北）



C8 北側空中写真撮影（上が北）



C9 発掘調査航空写真（上が北東）



C8 南側（寺屋敷）池状遺構精査状況（西から）



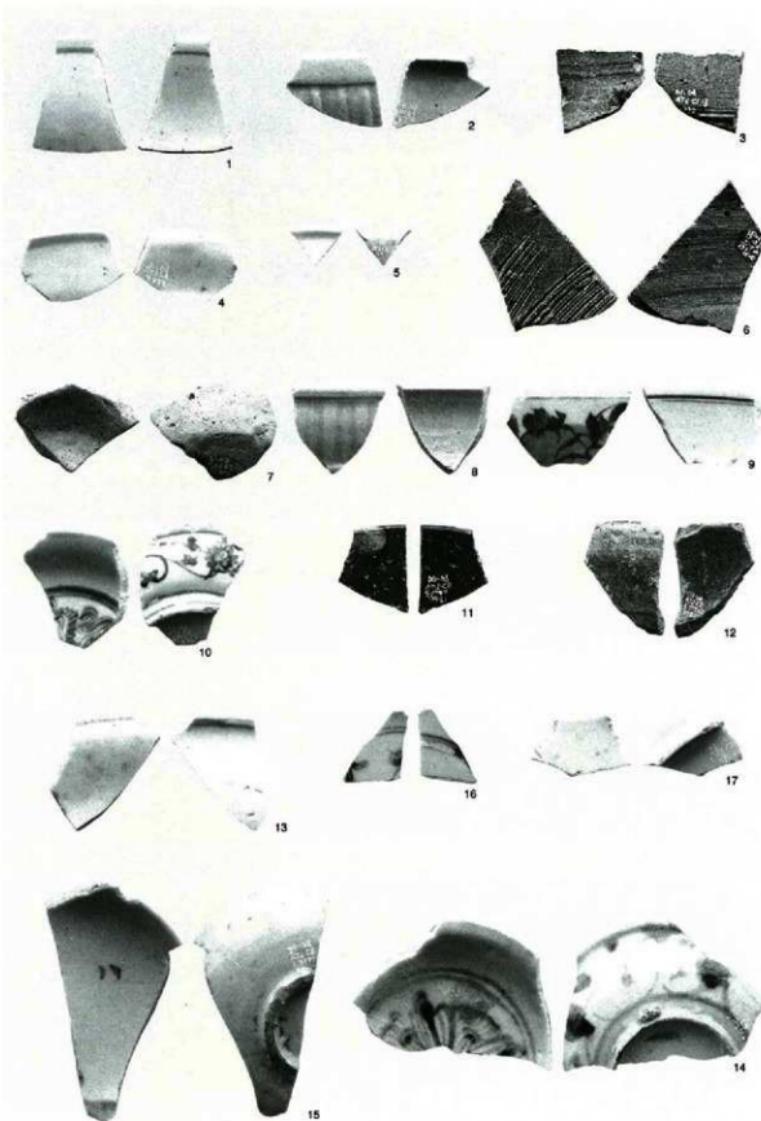
C8 南側（寺屋敷）池状遺構石組（西から）



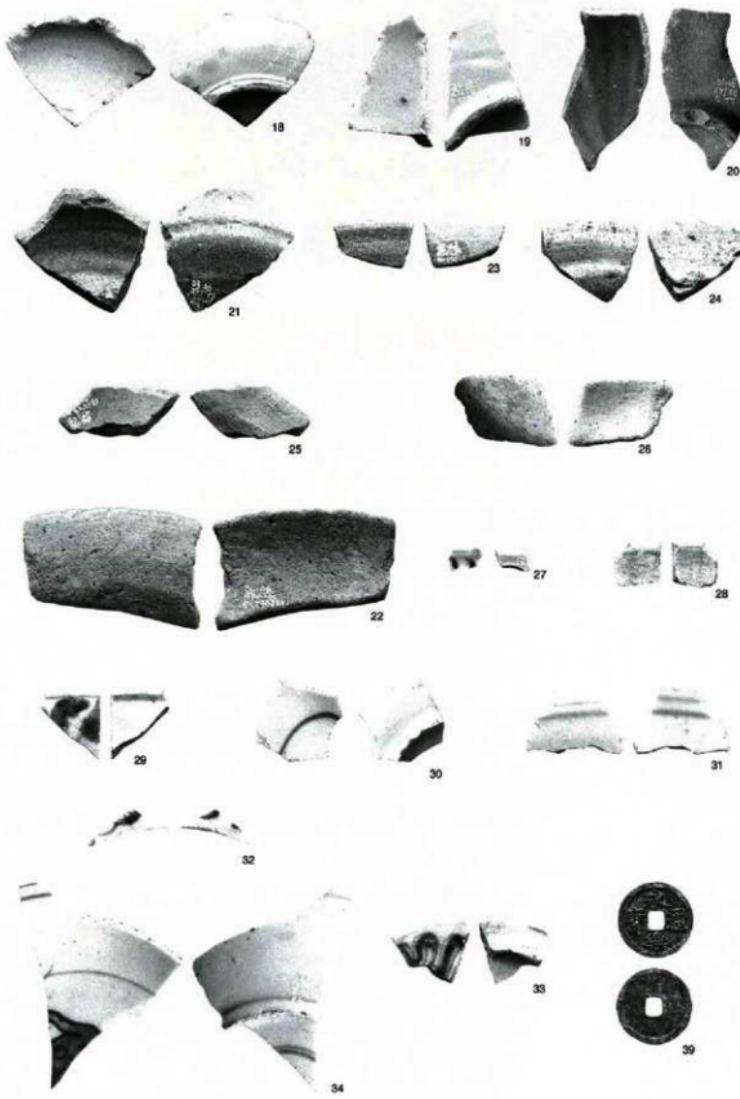
C9 布堀精査状況（北西より）



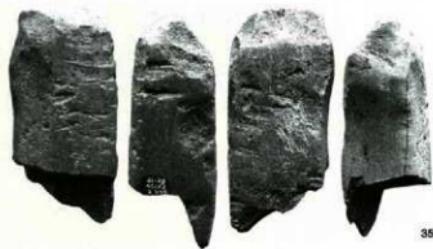
B1（千量敷）竪穴状遺構（西から）



遺物写真（1）



遺物写真 (2)



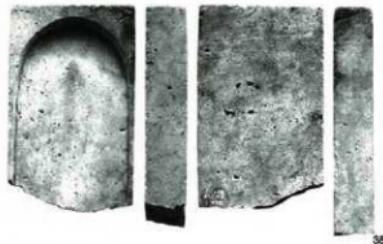
35



36



37



38

遺物写真 (3)

報告書抄録

ふりがな	あてらざわたてやまじょうあと							
書名	左沢橋山城跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	上田美紀							
編集機関	大江町教育委員会							
所在地	〒990-1163 山形県西村山郡大江町大字本郷丁373-1							
発行年月日	2008年10月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
左沢橋山城跡	山形県西村山郡大江町大字左沢字橋山	324	001	38° 23'	140° 13' 05"	平成5年度 ～ 平成17年度	5,027 m ²	保存のための確認調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城館跡	中世～近世	掘立柱建物跡 竪穴土坑跡 堀跡・櫓跡 井戸跡		磁器、陶器 鉄製品、石製品 石器		<ul style="list-style-type: none"> ・主殿や迎賓施設など城の遺構が判明した。 ・C8(寺屋敷)より、県内3例目となる朝鮮王朝「斗ヶ屋」の茶碗が出土した。 		
概要								
<p>左沢橋山城は北西部、北東部、南部の3区画に分けられる。</p> <p>北西部の中心となるのは、丘陵最高所の直下に位置するC4の「ゴホンマル」であり、ここに主殿が置かれた。寺院や主殿級の建物が置かれ、また、北東部には圍池も設けられていたと考えられる。C8は東側を通りの街道からの見通しが良く、街道を通るものの権威を誇示する役割を担っていたものであろう。南部では、大規模な曲輪が東西両端に造成されているものの、大型の建物のような遺構は確認できなかった。このことから、南部は北西・北東部の主要曲輪群を守るために、防衛を担ったものとみられる。</p> <p>出土遺物は、同時期の東北地方における主要な城館跡と共通する組成となっている。また、県内で3例目となる朝鮮王朝陶器も出土しており、物流を掌握した在地領主の姿を描くことができる。</p>								

左沢楯山城跡

発行日 平成20年（2008年）10月23日

編集・発行 大江町教育委員会

山形県西村山郡大江町大字本郷丁373-1

印 刷 株式会社 大風印刷

山形県天童市久野本4-16-2